

600

特261

43

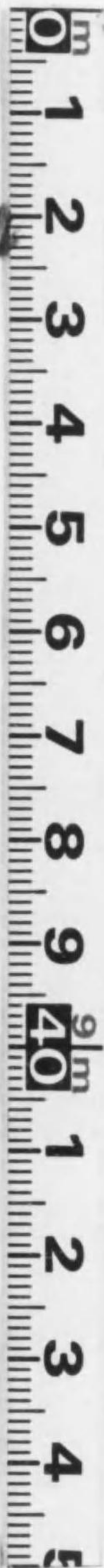
632

62



心靈界讀本
全貳號

心靈界



始



特261
632



心霊界讀本

全貳號



子實親より孝行し

子愛から親のすねかじり
○よ

三條の教憲

(明治五年
三月頒布)

敬神愛國の旨を體すべき事

天理人道を明にすべき事

皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事

▲心靈界讀本全貳號

目次

私しの神様の御心と御業を畏こみて	一
上棟祭	三
遷座祭	一三
安心	一七
其儘祈れ	一八
自分勝手	二〇
祖先崇拜と國民道德	二六
善惡共に問題にも成らず	三〇
至誠と姿勢天の愛に抱養	三二

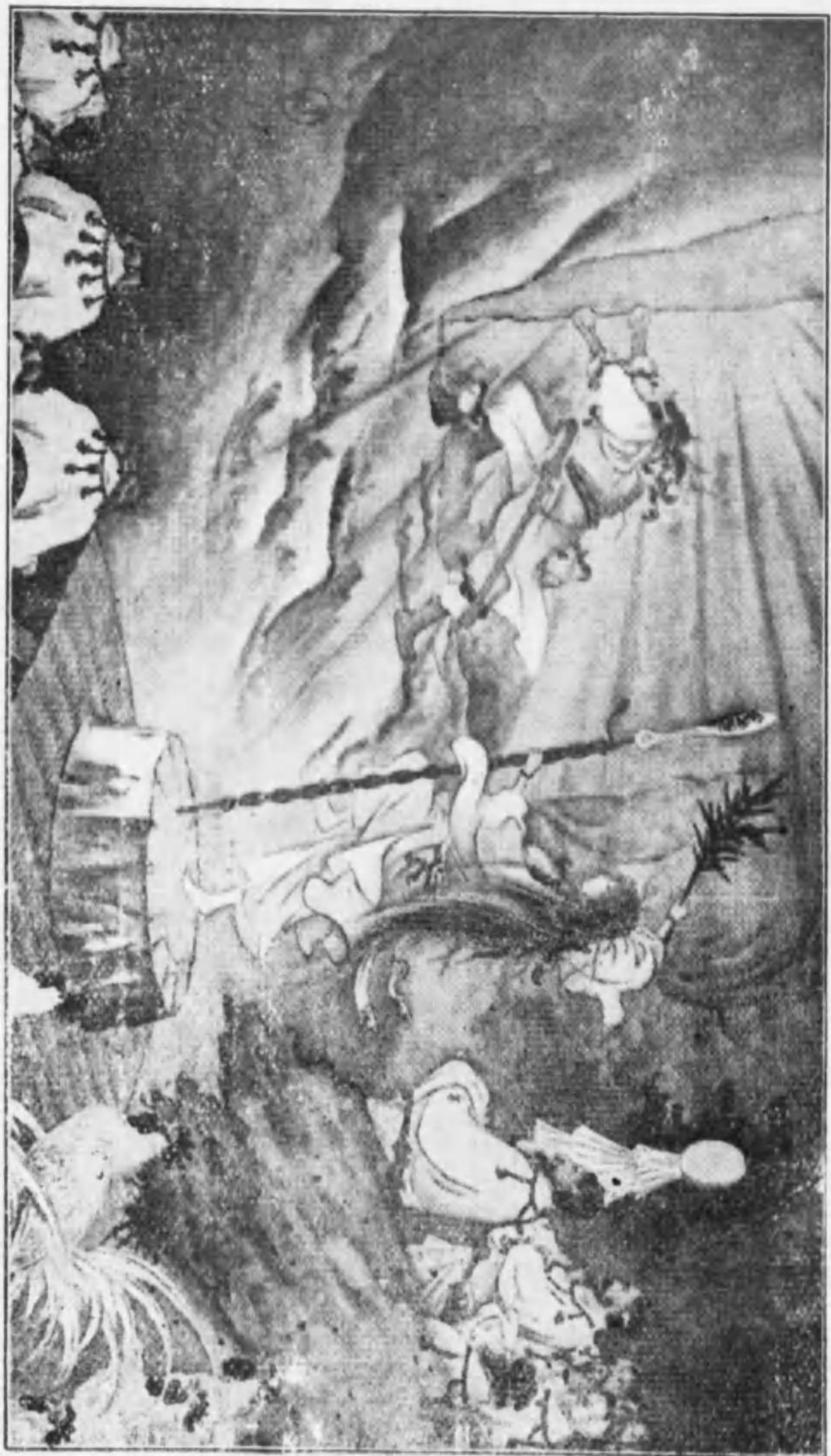
人	心	三三
三つの楽しみ	三五
夢の世 夢の夜	三九
天	運	四〇
人生の極意心霊界教	四二
心霊界 観世音尊像を拜して	四六
懺悔文 開經 偈	四九
摩訶般若波羅密多心經	五〇
本尊 上供 回向文	五一
先亡累代 回向文	五二
四 弘誓願文	五三
御佛供養之詞	五三
六根 精淨之大祓	六二

南 無 之 一 言	六五
人生の最大幸福は後悔無き人	六六
開 運	六八
安心立命長生きの秘法	六九
苦勞の勝利者たれ	七一
大山神靈界に於て	七二
國 難 打 開 は	七四
變 ら ぬ 心	七五
善 惡	七六
玄米を生で喰ふ理由	七七
自 力 更 生	七七
望 成 功	七九
安 心 の 秘 法	八〇

神國の民草に生れた	八二
幸	八三
陽氣たれ	八四
盆	八五
心霊界の健康法	八六
祈	八六
勸め度き事	八七
格の通りに候也	八九
神動を生活の上に顯現せよ	九一
因縁果の問答	九四
第一注意、第二注意	一一一
第三注意	一一二
進歩發達の秘決	一二二

信	一一四
天業と人力とを知れ	一一七
身(三)毒と七難	一一九
極樂と地獄	一二三
嚴禁之事	一二六
世(夜)(豫)の中	一二九
思想念意	一三二
境遇に感謝せよ	一三三
廻	一三六
信仰之一步	一三七
安心の秘決	一三八
世	一三九
艱難に向て進め	一四〇

クサカンムリ	一四四
四句の偈文と般若心經	一四五
教はる人より教へる人	一五〇
常に備へよ非常時に	一五八
有り難い理由	一六二
安心係	一六三
心靈界之教	一六五
不動尊 不同損	一六六
地獄に一ト落ち	一七七
先づ此んな者かな	一七四
人間の最後は信仰	一七五



心 靈 界 同 志 に 望 む

同志は尊皇 敬祖 護國 心愛 萬物の靈界等の眞隨の精神を體得する事を望む者で
有ります。

猥に汜濫する如き思想にとらはれず、心廣く、世間廣く、氣樂の心、のんびりした精
神、健康以てよく、働き身を立て家を立て、國を守り、自己を守り、其れで始めて氣
軽く十五夜の月様の様に丸ひ、丸ひ、眞丸ひ、心すみ渡たる心、晴々した心、此れ
が自己自身の心靈界維新忠孝の確立で有り、長生の妙法であります。
心靈界の目的と精神である事を諸君に希望する所以であります。

私しの神様の御心こ

御業を畏しこみて

- (1) 天地日月木も花も すべて物の物を造り成し
- 實現し給ふ大御神 造化の神の尊しや
- (2) 深き恵みを身に浴びて 朝な夕なに仰ぎつゝ
- 仕へ奉らん大御神 天津御神の尊しや
- (3) 靈魂を吾に與へられ 身体をこゝに授けられ
- 生れ出でにし嬉しさを 何に譬へん譬ふべき

(4) 闇に迷はん我等をば

樂しき園に導きて

守らせ給へことばに

神の恵みのいやひろく

(5) 現世幽界も晝も夜も

今も昔も行末も

守らせ給ふ天津神

あな有難や尊しや

(6) 我等はこゝに畏みて

只一筋に真心を

磨き磨きて千代八千代

盡せぬ幸福を受けなまし

(7) 嗚呼心霊界の

神の道々々々々

上棟祭

上棟祭は『むねあげのまつり』と訓んで神社宮殿の造営や家屋邸宅等が落成したる時に、人間生活上の三大要素である。衣食住の祖神を奉齋して家屋宮殿の安固と家人や氏子の健全を祈願するのである。

然して此の儀式は地鎮祭に始まり、新始や立柱式を経たる最終の祭典なので苟も家屋宮殿其他の造営普請を成した場合其の竣工を告ぐると共に必らず舉行せねばならぬ勿論衣食住の祖神は豊受姫神で伊勢度會の外宮に奉祀する神であつて、此神の靈徳に依り人類生活の安全を祈請するは人情自然の發露である、上棟の事を古く上梁と云つた時代もある、是れ棟や梁は共に家宅の樞要なる部分であるからで、棟は即ち峯木の意味で梁は内張の義である、工匠の頭を棟梁と云ふも此の二を合せた稱で家屋樞要の任務を負担する主腦者たるの意に出でたものである。

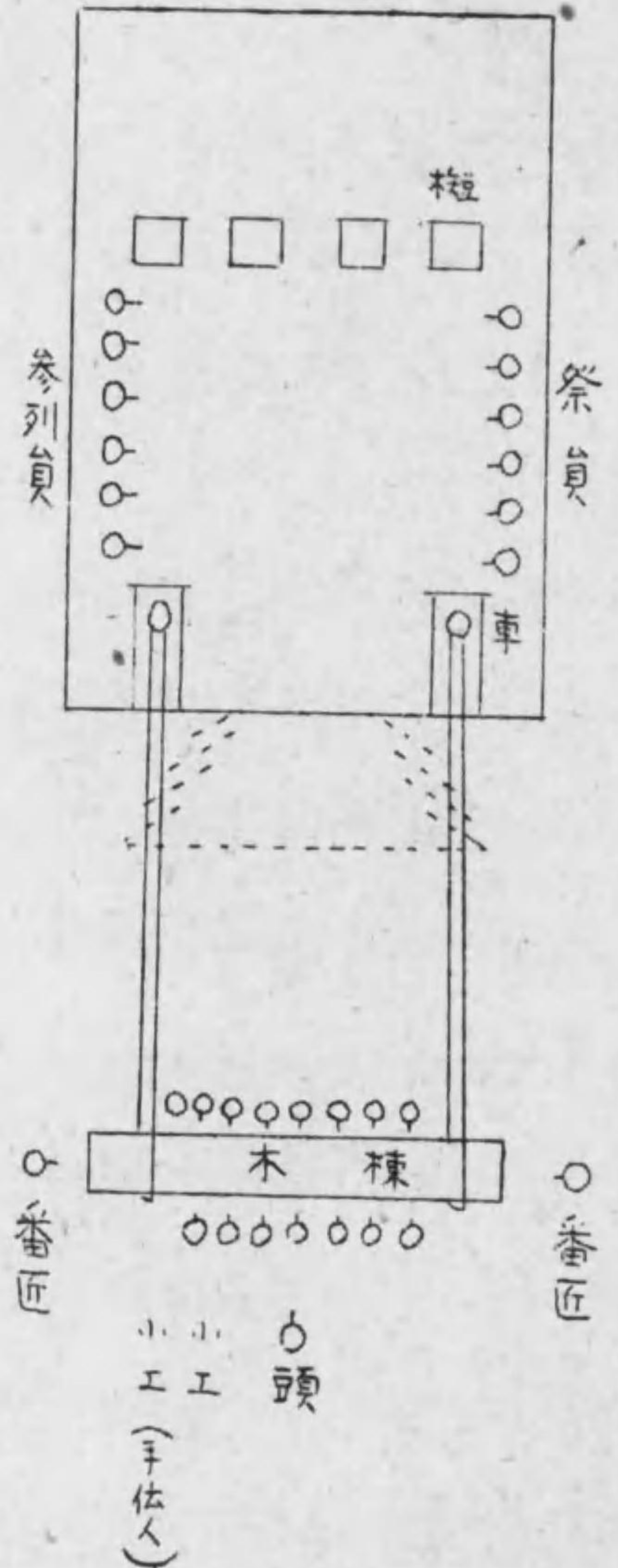
上棟式の祭神としては古來屋船久々能智神、屋船豊受姫神、手置帆負神、彦狹知神、の四座を祀つて居る、然し後世になつて一般の匠家は右四座の神以外に天御中主尊、大日靈尊、月讀尊の三神を始め神代の諸神や陰陽道の神々や聖徳太子を祀り、天星玉女神や鎮宅靈符神を配祀するに至つた、(此の天星玉女神は天體の廿八宿中でも最も

工匠に尊ばるゝ北極女星神で、鎮宅靈符神は陰陽道で尊崇する商賣繁昌子孫賑盛の福神である)

上棟祭の儀式に就ては其の種別も尠くないが茲に大体を記して見ると左の六種に區分される、即ち

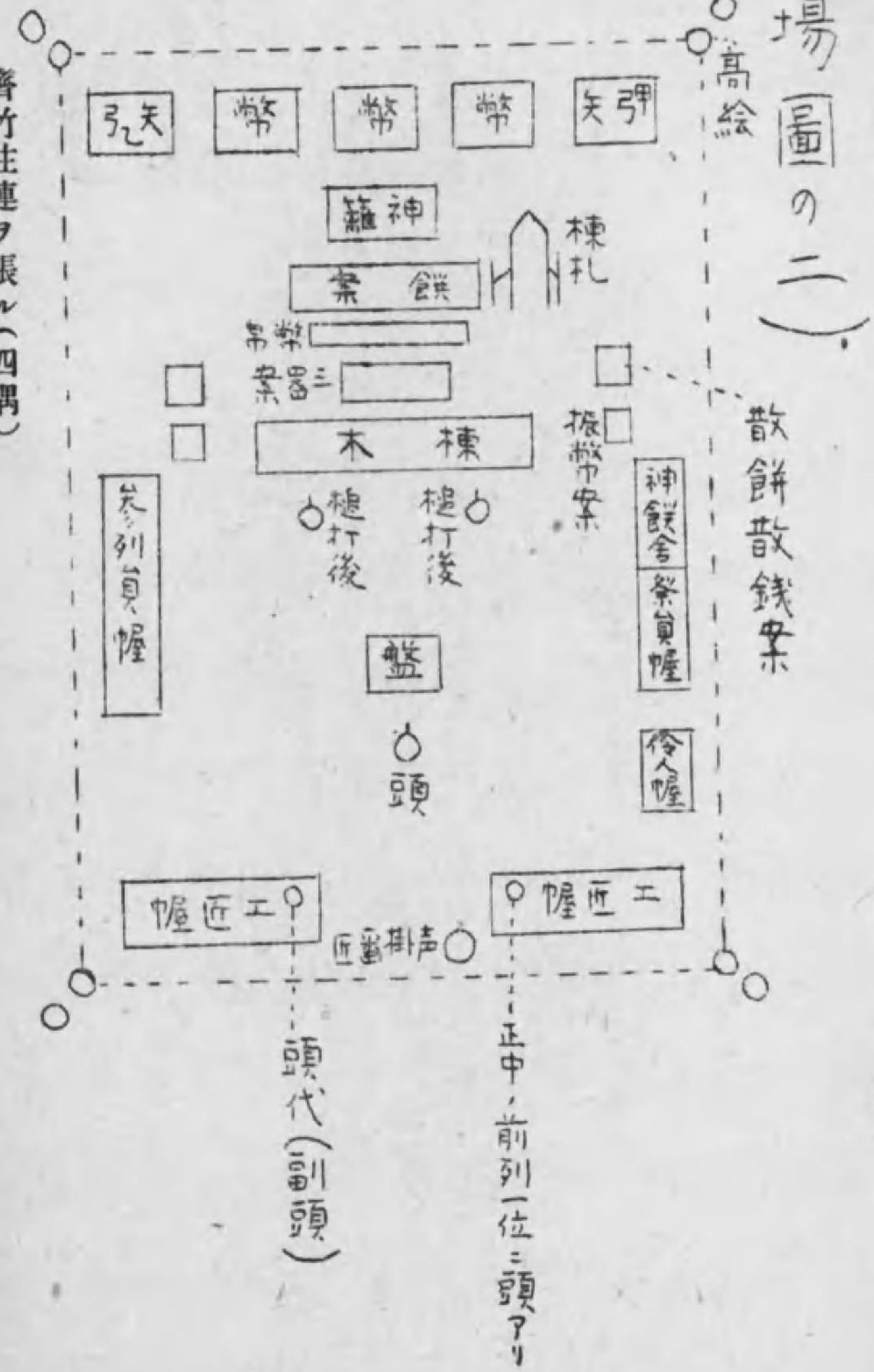
- 其一 是屋上に祭場を設備し神籬を奉安して弓矢幣束を建てゝ行ふもの
- 其二 是屋上に弓矢幣束を建てゝ神籬を安置せざるもの
- 其三 是神籬を設けず及び弓矢も飾らず幣束のみを建てゝ行ふもの
- 其四 是屋下即ち敷地内の中央に神籬を置きて屋上に幣束弓矢を建てゝ行ふもの
- 其五 是屋上に神籬を安置し幣束弓矢を建てゝ式を屋下にて行ふもの
- 其六 是屋上に幣束を建てず弓矢も飾らず屋下に神籬を置きて行ふもの等で、此等を悉く述べ盡さむは容易な事でないから、第一例の階上式に就て要説することゝした、然して此式を行ふには先づ祭場の設備と用具とに就て一通り解説する必要がある。

(祭場圖の一)



(祭場圖の二)

齊竹注連ヲ張ル(四隅)



六

祭場の方位は南向が本則であるが東西に面しても差支ない、若し北向の建物ならば南面して式を行ふがよい、幣束の数は三本以上(或は一本の時あり)五本七本と数多く立て、一本に一柱の神を祀る習ひである、幣束や弓矢は一種の裝飾であつて又式の始終に太鼓を打ち、引綱の儀を行ふとか、祭の前後に樂を奏し鼓を打つ等の儀がある、その打ち方は始に乱調子次に一兩度打つといふ例で此等の故儀に倣ひ今尙ほ裝飾を設備する有様である。

さて用具と云へば普通に云ふ調度なので先づ幣束を作る、然して之に扇と鏡とを附する(俗に矢車と稱す)



紙垂四垂或は八垂
 扇三本を矢車に作り其接目と水引にて結ぶ三ヶ所なり

幣束を作るには檜製の幣棒

鏡紙
 麻の結
 鏡
 五色絹
 麻

幣棒

長一丈二尺
 又は八尺

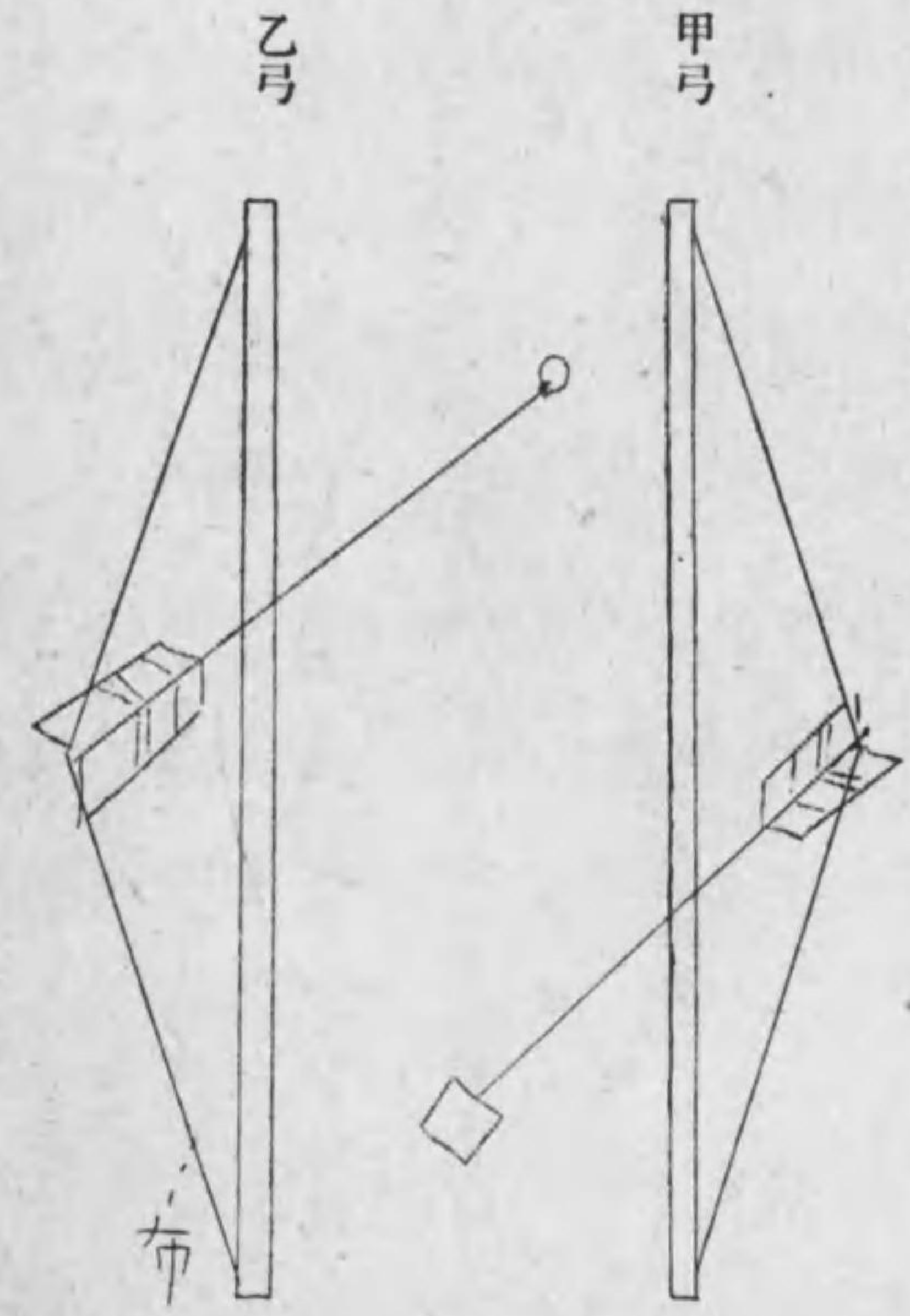
中引一尺五寸(幣を挟むための)

里法にて七五三と書く 角二寸五分

七

用紙 丈長若くは大廣奉書五枚
(左右に二枚宛計四枚上の鏡一枚) 五色絹 各一丈 麻 五十目 鏡 經八寸 或は一尺 白扇 三本 五色の
 絹は左右に折る 色は中央より青黄赤白黒と左右に分つべし、紅白二筋にても宜し
 弓二張(甲一本 乙一本) 檜製で 長一丈二尺又は八尺、角二寸五分角墨にて三五七三五七と横線を引く
 矢二筋(甲一筋 乙一筋) 檜製で 甲の矢を陽の矢とも天の矢とも云ひ、乙の矢を陰の矢とも地の矢ともいふ
 甲の矢は俗に云ふ箭矢で乙の矢を雁股といふ

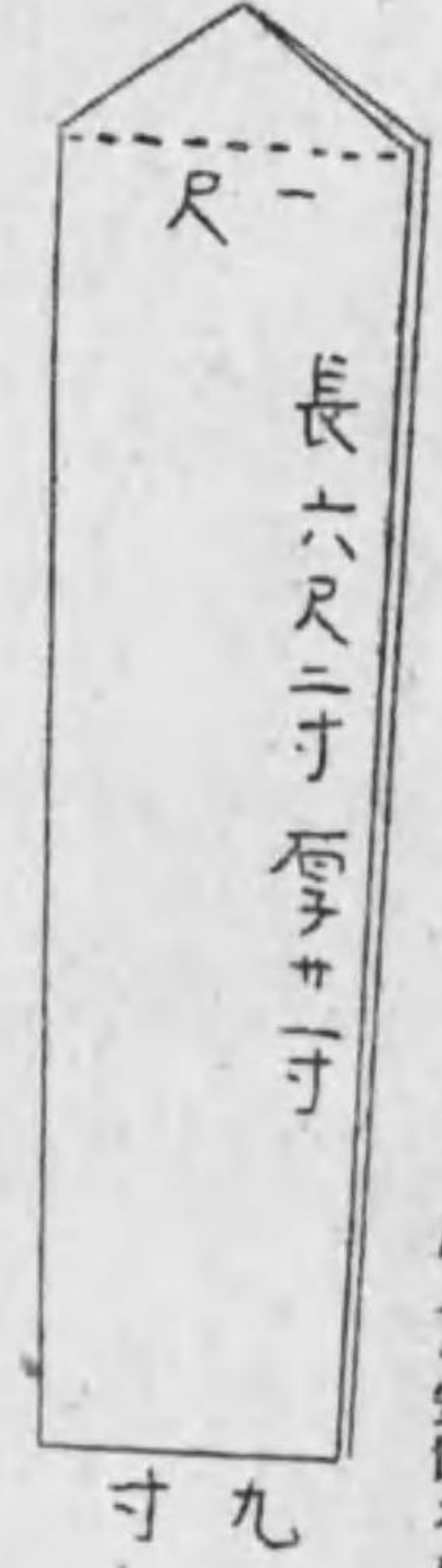
矢串八尺矢羽二尺四寸
 二寸角箭厚さ一寸雁股
 同寸
 弓矢の並べ方は甲弓は
 向つて右乙弓は左に置
 く



八

棟木、尺棹二本、博士杭一本、振幣二棒、散餅楕圓形 紅白二組 散錢金銀錢三百三十三組 折櫃二合餅鏡 榎二柄、綱二筋、案四脚、真神普通、棟札
一枚檜製、白紙ニテ包ミ水引ヲカケテ 屋上ニ安置スルヲヨロントス

棟札ノ形



(表の書式)

奉鎮祭 屋船久々能智神手置帆負神 何々新築屋舎
 屋船豊受姫神 彦狹知神

(裏の書式)

何々長氏名 何々氏名 何々氏名
 年號月日上棟祭執行齋主何々教會長職名勳功氏名
 工事設計者氏名 工事監督者氏名 請負者
 大工氏名 左工氏名 石工氏名

棟札記載の法

九

祭式次第並に順序

當日早旦祭場及祓所を裝飾す（屋上祭場）時刻祓所に着く

先づ祓主進んで祓詞を奏す

次に大麻司塩水司進んで大麻塩湯を取て神饌及調度祭員伶人諸員を祓ふ

次に祭員以下諸員祭場所定の座に着く

次に典儀起て祭儀を始むる由を告ぐ一步前進
一揖す

次に齋主進んで降神式を奉仕す此間奏樂
一同敬折

次に陪膳以下手長神饌を供す此間奏樂

次に工匠頭棟札を神前に安置す

次に奉幣物品幣帛にて副齋主奉獻す
柳宮に納めし幣帛を奉るべし

次に切麻散米を四隅に撒く白紙の方一寸のものなれど五色の絹を
方一寸位に切りて用ゐてもよし

次に工匠三器を神前に置く三器とは曲尺墨刺鉞にして之を
水 水字形に置く防火の意

次に一番匠二番匠軒を下りてし棟木の本末に曳綱を結びて兩端に正立す此時幣を持つべし
次に工匠小工（手傳人）等棟木の兩側に列立す

次に屋上の祭員及頭諸工等參列員一同曳綱の左右に列立して手を掛く

次に頭代幣を振つて永々と發聲す 左右左と振る

次に屋上屋下の諸員之に應じて永々と綱を曳く此時木遣歌を歌ふことあり

次に一番匠二番匠屋上に昇り棟木を楯の上に載す

次に槌打役二人槌を執て棟木の本末の前に着く

次に聲掛番匠所定の座に着く

次に頭幣を振て祝詞を唱へ幣棒にて盤を撞く
祝詞の例第一回、築立つる柱は此の大神の大御心の鎮め也或は千代に八千代に榮ゆ

べし、（盤は檜製にして組板の如き長方形のもの）
次に聲掛番匠撞音を聞きて發聲す 千歳棟或は千歳頭を發聲す棟、頭は同音に發すべし

次に槌打稱唯して天地の槌を一齋に打つこと二度稱唯とは「おー」の返事にて打つ姿勢は左
足を引き右膝を立つ

次に頭幣を振て祝辭を唱へ幣棒にて盤を撞く

祝詞の例第二回、取擧ぐる棟梁は此の大神の大御心の榮なり又は萬代に八百萬代に榮ゆべし

次に聲掛番匠撞音を聞き發聲す 萬歳棟と發聲す但し語尾を上げず

次に槌打役稱唯して天地の槌を一齋に打つこと二度

次に頭幣を振て祝辭を唱へ幣捧にて盤を撞く

祝詞の例第三回、取置ける『タルキ』は此の大神の大御心の齋ひ也 又は天地の共無窮クハシエに榮ゆべし

次に聲掛番匠撞音を聞き發聲す 永々棟又は無窮頭と發聲す此の場合の棟、頭は異音に發すべし

次に槌打役稱唯して天地の槌を一齋に打つこと二度

次に頭以下諸工復座す

次に頭代撒餅散錢を撒く 頭代の替りに家主又會社なれば重役等の撒くことあり一人にて四隅に撒く故に之を四方固めといふ 四隅とは東北、東南、西南、西北、なり

次に頭進で壽辭を白す

壽辭は即ち祝の言葉にして之を神前に向つて讀む、文の趣旨は四柱の神の恩頼に依て無事上棟を終りたれば今後家屋を守られたき意なり

次に工匠三器を撒す

次に齋主玉串を奉て拜禮 祭員列配

次に家の主人全上 拜禮

次に頭全上 拜禮諸工列拜

次に參列員全上 拜禮

次に撒幣 帛帛を撒す

次に陪膳以下手長神饌を撒す 此間奏樂

次に齋主進で昇神式を奉仕す 此間奏樂 警蹕一同警折

次に頭棟札を撒して工匠に渡す 棟札は棟木に打付けるは正式なれど一時之を適宜に保管す

次に退下 頭が棟札を工匠に渡す時より退下する時には一同連拍手をなす例あり

拍手は目出度ときに行ふものにて上棟祭は此上なく目出度祭なればなり

遷座祭

遷座には正遷座と下遷座とがある、前者の正遷座は仮殿から正殿へ神靈を遷御し、後者の下遷座は正殿より仮殿に遷御し奉ることである、殊に遷座祭は雜祭ではなくて公式の大祭であるから現行の神社祭式中にも式次第の條文がある、然して此の祭式の規定は各神社の古儀舊慣に對しても相當應用の出来るやうにしてあれば、次節の祭儀を講ずるに於ても該條文と舊儀とを對照して成るべく諸式を統一するよう、さて本殿の

遷座祭に就ては神社祭式中必要と認むる條項を掲げて其の式次を説述する

當日早旦本殿仮殿を裝飾す 祭の當日は各社の由緒ある日を選ぶ（内宮は九月十五日に裝飾し翌日遷宮祭翌日神嘗祭を給はるが如し）

時刻齋主以下仮殿所定の座に着く 時刻は各社に由緒ある時刻を選ぶ神宮にては夜の亥、子の刻を用ふたり、兎に角遷宮祭は夜陰の祭なれば其心得肝要なり

次に修祓 是より先手水の儀あり

次に齋主仮殿の御扉を開く 此間奏樂 警蹕

次に齋主祝詞を奏す 祝詞奏上は微聲にてなすこと古儀なり

次に齋主殿内に參進し諸員各其の位置に列立す 齋主は假殿の内陣に參進し所定の位置につく而して木綿襪を右肩より左腋下に懸け面覆手袋等

を用ふ、祭員各其の位置に着き遷座の用意を爲す此時典儀一人の贊者に命じて召立文（即ち各役名を記したる文）を讀ませて列立の終りし後燈を消し一人の贊者は祭員の整列を正す

次に遷御 此間奏樂警蹕（次第左の如し）

（い）諸員列立後典儀燈を消すことを贊者に命ず

（ろ）鶏鳴所役の發聲後御靈代を辛櫃又は神輿若くば羽車に奉遷す

（は）典儀出御を宣す

（に）警蹕所役發聲

（は）奏樂

（へ）遷御此時御船代或は唐櫃等適宜徐々に仮殿より本殿に進行す

（と）典儀贊者に命じて進行を促す

（ち）絹垣御靈代の周圍を圍む、之を庭道布單と云つて薦の上に白布を敷き後より卷きつゝ進む

（ぬ）前陣後陣の列を整へて本殿へ進む

（る）諸員行障絹垣を奉仕し前後陣に整列す

次に入御 （此間奏樂警蹕）是より先副齋主進んで本殿の御扉を開き捲簾す

次に齋主御靈代を神座に奉安す 終て再拜拍手覆面手袋木綿襪等を除去す

次に齋主御扉の側に候し諸員所定の座に着く

次に陪膳以下神饌を供す 此間奏樂

次に齋主祝詞を奏す

次に齋主玉串を奉りて拜禮

次に副齋主以下拜禮

次に陪膳以下神饌を撤す 此間奏樂

次に齋主御扉を閉ぢ畢りて所定の座に着く 此間奏樂

次に各退出

假殿遷座祭次第は本殿遷座祭に準すべし

行列次第

(先導) (鐵杖) (松明) (真榊) (王鼻) (白杖) (贊者) (小榊)

(小榊) (小榊) (伶人) (伶人) (伶人) (盾) (鉾) (矢) (弓) (太刀)

(贊者) (副齋主) (以上前陣) (行障布單) (御靈代) (布單行障) (以下後陣) (菅蓋)

(齋主) (菅羅翳) (太刀) (弓) (矢) (鉾) (盾) (松明) (小榊) (小榊) (小榊)

(小榊) (小榊) (後警固)

小榊は有力者の子女に榊の小枝を持たして列次に加ふるものにて其服装は水汗狩衣にし女子は袴を付け髪は垂下とすべし

安心

浦安國(日本國ノ古名) (心ウコ、ロ) 裏無以素直、裏道で無む、やましくない、公道、表道
素直(素カザリナシ) (直チヨクシキ) 正しき行爲で有りますから他人より何と云はれ様と
何ら差し遺る無き心で有る可きなものですから。

日本國土は心の内に樂み有りと云ふ意味でありまして、心に何ら不安無き安心の國民
で有り、惶氣の人民で有らねば成らんので有りました眞の神國民で有りますからして
何處の家にも村にも神様を齋祭ります故に日本は神國とは云ふので有りますので
から、日本人は浦安國の心で無くては成りませぬ者で有りますにもかゝらず裏山志
意(ヒカゲノヤマ) (シイ) 様な心の持ち様で何んで眞の人間感に養はれましょう、何で悟
れましょう只徒に、裏面にのみ走る心、人を恨む心、が即ち裏山志意と云ふ如く漂る
心 迷る心 幽靈の心、より浦安國民となり安心の人となりましょう、偕其近道は

と申そうなれば天照皇大神様と拜し奉り今日一日の安心を求めますので、今日一日と云ふ事は天照皇大神様を御賛美奉る敬言で有りまして日の大神様と稱へ奉る世界を照し賜へる御慈悲の御光であり現であります。

申上ぐるも尊き極みでありますが我が心靈界教會信者は幾同音に天照し賜ふ、榮へ賜ふと、心の底より感謝し一生懸命に働き大きな、心持ちで愉快に氣樂なのんびりとした暮しをして居り又他人様にも御分けして居ります、安心を御求めの方嬉び度ひ方氣樂に大丈夫で暮し度い方御出下さいと呼びかけて居ります今すぐと御迎さ申上ます浦安の國民世界代表の人心………

其儘祈れ

體裁抜きで、穢た其儘祈れ、吾等人間が清く成れ、正しかれと思つた處で實行は不可能で有る事を願た處でむづかしの事で有ります。其儘とは(人が盡)(カーバイ)天命

(心ニ思フ限リ)と云ふ意味で有りますから、人事を盡して天命をまちて) 神様の御思召に叶ふ様に務める心が信仰の第一歩で有ります。如何に上部を麗に美しく装たからと云ふて疼ひ心に體裁能き事を百万編祈たからとて神様が嗚呼そふかと御聞き届に成ろふ筈は元より無ゐ(神は千里一眼)御見透し賜ふので嘘(詐)(ダマサセ)(偽)(アザムク)は三文の値價も無くとへ手足や顔身体も汗みぞろ、土まみれ、油手の仕事の儘御婦人は御しめを洗た其處其儘其都度極短く有りの儘單順に祈りましよう。神様は祈らざら前御願ひする前によく御存じて有らせられますから、小面倒臭く無く自分自身(自心)の儘素直に悪い事は御詫を申上げ善ひ事をして良ひ心持ちの時は感謝し奉るのが信仰で有るので。

ところが信仰する人多くは求むる事のみ祈る方が多ので有ります、金を儲けさせて下さいと祈る人は金を末儲け無ゐ人で、神様よ有難ふ御座居ましたと云ふ御禮(祝詞)は即ち儲た方で有ります。求むる人は不足勝で有るから其不足を補ふ爲に求めるので

有る其れは信仰でも何んでも無む人間の一番驚く可き我慾の塊りの幽者の一種で有り
ます。肉体を洗たからと云ふて心の穢を何とする腹の中の穢物をまさかこき出すわけ
にも行きまますまゐ、それこそ幽界に一人旅でしようされば祭典とか式祭の時こそ身を
清め着装て威義を正して陽々と堂々と神様の式祭を執行はなければなりません。

最し其際神様に御不禮があり不敬が有りましたは申譯の無の事です尤も注意を要す可
き事であります。萬善を盡し良心に恥無き行爲が尤も尊ひ精神 心が神靈に達し威
神力を蒙むるので有ります何んと有難ひ極では有りませぬか神様の御慈悲に絶りまし
よう祈りましよう今こゝで。

自分勝手

今日信者の方が訪問せられましたして私しに奥伎を教へて呉れとの申出でありましたので

問答の一、二を記載致しまして御参考に供します。

石井「奥伎を教わつて何にするのです。」

信者「食ふに困るから信仰の奥伎を覺るたいのです。」

石井「奥伎を覺るて入口と真中の處はどうするのかネ、君の奥戯(タハムレ、モテチツア)の奥戯でしやう

信者「奥伎を知らなければ信者を訪問する事が出きませぬので

石井「そうですか奥伎を知らんと慾するなれば先づ入口の信仰心「奥義」「君臣ノ道 五倫五常

正道、君國公 共ニ盡ス心」を基として「奥儀」「ウタガフ アヤフク思」を去り自尊を悟り御守護神様に「奥儀」
「イケニヘ、神ニ供」「イケニヘ、神ニ供」「覺悟」を以て神人共に天照皇大神様の御神靈を拜し奉り神佛の

御威力を蒙むらるゝ成れば奥議「ハカル立案スル」致しませしやう自分が徳を積み其
あまりの溢を他人に施す精神が奥伎と彰現で他人の病氣を治す事が出来るのだ
其ればかりか他人の惡念惡業を消滅させてやるのが心靈界の教で有るのだ

信者「私しは食ふに困りますから其の奥の信仰を教はり度いのです

石井「其奥は信者なり病人なりの不運不幸の方の良心なり精神なりに従ふので其の求に應じて行ふを『術』と云ふのだ

信者「其れではどうし食ふのですか

石井「食ふのですか口を開いて食物を口に入れて無茶苦茶にかむんですよ

信者「口で食ふ事は分かつて居りますが食ふ方法ですが

石井「食ふ種ですか 天無祿を與へず天(神)は人々に祿をお與へに成らぬ筈は無ののです其人其分を御與に成つて居られますが人間慾を慾儘にする爲め不満不足の思ひより自己に與へられたる徳を失ので有ります其で有りますから己々神靈に従ひ奉れば食ふに困る様な事は斷じて無の者です

信者「心細ひですネ

石井「こわいと思へばこわいがお化の火を借りて煙草を一ぶく吸ふと云ふ様な人は

少しもこわくは無ののですよ、心細ひ人は益々心細ひが神様の御心に従ひ深くも信じますれば何事も不運不幸の有る筈は御座いませぬ。

信者「言ひ苦むが信者からどの位頂けますか

石井「心靈界の教へでは信者から頂たくと言ふ事は毛頭考へて居りませぬ、有り難の心が有り難ひのですが信者の方々よりこちらが有り難ひのです御互が有り難ひ心が行爲と成つてあらはれが、あらはれるのであります

信者「不安ですネ

石井「貴下は何で禺數日の今日御訪に成りましたか 石井は奇數日を面會日と定めて置きますのを知りながら不都合ではありませぬか

信者「どなたも居ら無む時に良く聞き度いと存じましたのです

石井「禺數日には原稿を書き心靈界の基礎を立案せねば成りませぬので君の様な不都合な者は何事も不都合の事計りが相重り不運不幸に成るのが天命であります

す其でありまするから禮を頂き度ひなぞと想ふのは飛でも無ゐ事でこちらの
不運不幸を先方で引き受けて下さるからこちらから御禮を差上げ度い位です
幸福も病氣も一週する者で例へば五月發病する人は一度は治りましても來年
の五月には利息を付けて病氣をする者ですから因縁と云ふ者程世の中には
いは御座いませぬ

信者「因縁を切ると云ふ事はどうするのですか

石井「病氣を治し度いと思ひましたなら神様に御詫をするのですよ、自分で出來ま

せぬ方は教師の方に御取り次ぎをして頂き御禮をする氣持ちが有れば結構で

ありまするし御隨意です

信者「御禮は何程位ひ頂けますか

石井「貴下は頂く事ばかり御聞きに成りまするが御禮と云ふ字は山に（拜）木を植

へ豆々しく動きますれば豊となります（神様は示給ふ）と書きますから其心

を（示）します「禮と讀みます此れが心靈界の教へであります

君慾ばるよりほうばれど云ふ事を考へて見給へ、かなり収入多かつた人で
あり成がら食ふに困るとは解し難き世の中ではありませぬか、

食ふ事より収入の事より他人に嬉ばれる事のみ専心に行ひ徳を御積みなさい
よ其れが、やがて子孫に迄徳があまりますよ、信仰の道、神の御力に頼りな
さるのが心靈界の教でありますよ、心を大きく氣を長く樂しき陽氣に其日其
日を暮らします事に心を寄せて生きかへのある様共に共に御祈り致しましよ
うそうして感謝の良き一日を迎へましよう

一言特に申述べ度いのは我心靈界の教師方を始め信者の方はすでに祈るよりも尊有
り難いと云ふ御禮の言葉のみに満ちて居りますよ祈るとか求めるとかと云ふ事はまだ
信仰の眞隨では無く迷道に、よたよたとどりて居るのです、信仰の道に進み神人の
中真（忠臣）（中心）にいつも居らなければ駄目です、其の心持ちに成つて御覽

んなさい其れこそ不運とはどんな者だか不安と云ふ事などはてんで考へる暇無く愉快の人となり従て病氣をして居る人が不思議に想ひます。

お天とう様は君の様に心の暗き方を御照し下さるのですよ早く明るき心に成りて御覽んなさい幸福に満ち満ちて思はぬ収入もあり御利益くの御恩託を蒙るのですよ色々な問答の内に此の頁を中止致します御参考までに

祖先崇拜と國民道德

我が國の祖先崇拜は日本國體と結び附いて、獨特の意義を持ち、我が國民道德の根幹を形造つてゐるものである。この我が國獨自の特色を有つ祖先崇拜の本質に就いては、既に幾多の先學によつて説き盡されてゐるところであるから、それは省略して、こゝに私はこの祖先崇拜から導き出された國民道德の徳目の一二に就いて、その派生的経過を瞥見してみたいと思ふ。

第一には一家、一族、一國の融和統一、即ち團結力の緊密なる事である。

一家内に於ては、お互に血を分けた同志であるから、親子兄弟は常に利害を超越して、一心同體たるべきものであるが、實際に當つてはそれが完全に行はれてゐない事は我々の周圍を見廻しただけでその實例に乏しからぬ所であらう。親子兄弟に於てさへも斯くの如きであるから、それよりも更に血縁の遠い一族間に於ては、この事は一層著しいものがある道理である。

然し、祖先崇拜の念が昂められた場合はどうか、一家に神棚があり、一族に氏神がある。日々神前に跪拜する事によつて、一家族はその血縁の遙に遠い昔からお互の現在に及び、お互の血縁の今更に緊密なるものある事を、何時とはなしに感得して來るのである。お互の感情の衝突意志の疏通が、この爲に幾ら和らげられるか知れまい「兄弟は他人の始まり」といふ諺がある一方、「兄弟離にせめけど外侮りを防ぐ」といふ事實の發揮されるのは、崇祖の徳の自らなる現れであらうと思ふ。

一族間に於ても同様な事が言はれる。昔は一氏族の間には氏神があつて、氏の長者が一族を率ゐて、春秋二回又は數回お祭を行つた。同一の祖先を祀つた神前に集まつて、神事を執行するとき、一族中の各家族は、互にその血縁關係を今更の如くに感じられ、氏全體の一體感が湧然と湧出て來た事であらうと思ふ。こゝに一族の融和統一團結協力があつたからに行はれたのである。現代ではこの氏神に對する意識が莫然化し、また昔時の如き氏神祭は廢れたといふものゝ、同一祖先を崇拜する意識が昂められた時、また同様な事が言はれ、實際化されるわけである。

一家、一族に於けるこの事は更に一國に擴大されても同様である。我が國民は、各自家の祖先を崇拜すると同時に、一國全體の祖先にまでこれを擴大してゐた。即ち我が國民は皇室の御祖先であらせられる天照皇大神を、同時に國民全體の共同祖先であらせられるとの信念を持つてゐるのである。同一の祖先を戴く皇室と國民との血縁關係に立つ我が國は、それ故に權力關係に立つ他國に見られぬ融和統一を持續し來つた

事は自然の道理である、忠君愛國の念は此のづからなる發露であつて、その熾烈なる絶對に他國の追隨する能はざるものがあるのである。

即ち祖先崇拜の信仰は、愛家心から更に進んで愛國心となり、これによつて一家、一族、一國の融和統一が完うされて來たのである。

祖先崇拜はまた廉恥の念を盛ならしめた、我は祖先の後身であり、祖先の延長であるとして我は子孫の前身であり、子孫は我の延長である。我は突然に現れ來た孤立的な存在ではなくして、我は祖先と子孫とを繋ぐ一個の連鎖である、祖先と我と子孫とは三位一體のものである——これが祖先崇拜に立つ考へ方なのである。かうした我であるから、今この我を辱しめ、汚す事は、單に我一個の辱、汚れではなくして、祖先を辱かすめ、汚すと同時に、子孫を辱かすめ、汚す事となるのである。かうした考へは、自然に我の廉恥心を盛んならしめ、名を惜しむ念を強固ならしめた。古武士が戰場に出て名乗を擧げる時、祖先の名を並べ、その武功を唱へたのは、この祖先を辱

かじめぬ自分の武功を示さうとのおのづからなる示威行動であり、身辱かじめられては、すつばりと腹を切つたのは、以て祖先を辱かじめまいとのおのづからなる現れであつたのである。

この廉恥心はあらゆる道德の根源をなすものである。少くともその大半はこれから發してゐる。それ故に、實に祖先崇拜は、道德の一大根源であるといふ事が出来るのである。

此外、祖先崇拜から派生せられる國民道德としては、敬虔遜虚の念、淳風美俗等を擧げる事が出来るが、それは他日に譲り、現下の世情に顧みる所あり、前二項のみに就いて略述した。

善惡共に問題にも成らず

悪るいが悪るいに成らず、善が決して善と決つた者では無る、悪るい事を良くするの

が人間性の智識で有る、善い事も成さなければ、決して良いとは言へぬ。又善い事を善い事に成して始めて良いのであります。小さな善い事は立ち處で良いと云ふ事がハツキリと分るが、大きな善い事は現在の處では悪い事のように衆目の見誤る事が殊に多るのであります。極刑に處せられた其當時は、國賊の様に歌はれた志士が、百年の後には、國士と敬まわれ神に祭られ又は御佛に念ぜられた人方は、決して少なく無い例であります。それでありますから何事も一概に善惡の批評を言ふ譯には行きませぬ。そうかと云ふて、思ふ以上に成る事も又少なく無るのであります。

一人の世の中でない以上は、想ふ様な事には來らぬ者です、然らば一番の良い方法はと申しますれば、他人の善を探り、自分の惡を棄てる、勇氣と決斷と寛大な心持が必要であります。さうすると頑固と偏窟、ひねくれが、自然と失せて他人より尊敬の的となるからには愈々自分の缺點を見出し、同志の忠告を入れ導に従ひますれば、仁儀道德が己すと修養され、他人も吾も、許す事の出来る信用が、態度姿勢に現れます。

ので、人間これ以上の幸は御座居ませぬ。

至誠と姿勢天の愛に抱養

せられ一人一人が天照皇大神様始
め奉り御守護神様御先祖様に親く

御禮拜を怠らず、一步一步と堅く強く、踏締く前進致し、世界に乗り出す強き大きな
心がやがて護國の民草、大和魂の發露であります。

然る處人間教育を色々論議的に解く人も有る様でありますが、精神界は其人各人
一様には行かぬ者です。十人十色どころか其時其都度變りやすきは人心です。

其心がガツチリとして動かぬ人心なれば、其人こそ幸福であり成功する人であり
落伍者はやゝもすると成功者を怨み、誹り悪口を言ふ愚かにも哀む可き限りなれば得
て落伍者の通弊とする處であります。其變る心を不變せぬ様に教養するのが信仰の力
で無くては成らぬ者です、終始一貫の大精神の持主が成功者であり、健康者であり、
安心の天地に安座しやがて國家の礎となり、忠孝の道にいそしむ大人物であり、其心

が何事にも感謝生活であり、信仰生活であるので（謝恩は人生の花）美しかれど祈る
美しさよ、他人に分ん心靈界教會の、謝恩の實こそ誠の教であります。其誠が天（神）
に通するを至誠と云ふ。

至誠

あります。

マゴコロ、至誠、如神まことの心が、神様の如く何物にも感じ通ず、
此の心が眞、神である。誠の心が天に至る到着する事が即ち至誠で

姿勢

とは姿勢不動の如く、堅き心、堅忍不拔の精神、立派な善美な美事、
態度が至誠（死生）と共に相通する意味でありますので故に爲す事行
ふ事毎に祈願何事でも成就せざる事無く、尊き極であります。清き信仰の心、御神力
の有難さを感謝して此の項をとらひ。

◎人

心

笑て見れば 怒の種
怒て見れば 笑の種

一寸の間など、樂き人、喜びの心、晴たる日、雲無き心、風光、快な氣持、穩な氣分、晴朗とした身心、元氣に苦を樂に、怒を笑に、悲を嬉に、萬事萬端悉く、全部あらゆる事柄を不足で無く、大満足に、アノ大國様の様にニコ／＼と、笑て見れば笑の種、怒て見れば怒る種、苦虫を嚙潰した様な顔をしないで、苦虫を口の中より撮み出してをしげ無く捨てしまへば、其で良ゐのに、へそまがりかけつをまげて、親に似無ゐ子は鬼子だと厄理窟を付けて親一倍を掛けての苦虫面顔、そんな面を速に廢業して、晴やかな心、快活な氣分、樂しげな行爲、眞面目の世渡りを致しましう、天氣晴朗朗らかな心

天照皇大神様は 人波則天下乃神物奈利、須 掌 靜 謐 心 波、則 神 明 乃 本、主他利、莫令傷 心神勿と茲愛み賜ふでは有りませぬか、何をかくよく／＼する必要が有りましたしうか、只々、理窟なく、神様に縋り求め祈りましう、晴々しく元氣よく、然らば商賣繁昌し、苦勞無く健康となります。

家内中 なかよく サア祈りましう。

不足とは足が無ゐると書きます、幽靈に足が無ゐ、幽靈は生きて居る時に不足勝の心の持主で有るから足が無ゐ、其不足勝の生活者が、不満の爲め良からぬ事をする足が付さずぐ捉まる、捉まるとは、足に才か付くと書きます 不足の心を満足の心になる可く、祈りましう、今一度すぐ。

三つの樂しみ

昔會津藩主保科侯が山崎闇齋に對つて先生の樂みとなさる所は何事で御座るかと問われた、闇齋曰く、我れに三つの樂みがある、萬物の靈長たる人間に生まれたこと第一有文の世に生まれて書を読み、道を學ぶを得る事第二、而して、第三の樂みは最も大なるもので、卑賤に生まれて大名に生まれなかつたことで御座る、と答へた、侯が怪みて其の理由を問ふと、大名は深宮の中に生れ婦人の手に長じ御側近侍の者共からは

何も御尤も、かも御尤も、御意に叶ふ様にと許り力められて、遂に立派な馬鹿殿にされて終ふに反し、我等の如き卑賤の者になると、上役からも同役からも始終叱言や忠告の受け通し、自然に徳行を修め才能を研く事に成ると云つたと云ふ事である。猥りに自由を唱へ放任を叫ぶ徒輩は自ら鳩毒の中に一生を埋没せんとする者共等である。

苦勞は買てもしろ、心配苦勞より、安樂界の鍵は何處に有りやと尋ねなば、

即ち我心靈界に天與の思託有りと叫ぶならん。苦の叫び聲は今哉世界的と成つた、此の重大騒ぎの療術は根本打開策を確立せねば元より駄目で有る。

机上の空論は先ず措置さ人心安全の確立、即時實行にて取り掛る可きなり、全世界を通じ學者智識階級理論家は今哉何をか叫び求めん哉三尺の童兒より六尺の大人、元と來た道を辿りよく考へて見よ。

我が命(命)の立脚点に祈り求めよ サレバ與るん行結りの思相(死ニ相)に迷ふ勿れ悲劇より樂觀に轉換せよや。

自覺せよ迷入天地の公道に反する者悲劇常に生ず、天恵を授けられたる者常に正しく安心平和にして報恩感謝の念絶ゆる事無し。

進む處、歩む處濶歩する處、善道なるが爲め惡魔は恐れ慄退き散じ恰も天國とや云はん、高天原とや云わん、極樂とや申さん見よ、現在教育家學者と稱する者學文の切賣を仕て無責任極まるひ國民、國賊を養成して、危機を傳授し政治家と稱する者國民を胡摩化し、民福を忘却し、神職僧侶宗教家に至りては、大伽藍に住ひ金欄を着用なし寄附と言葉を借りて搖り欺偽漢に等しき行爲行動を敢てし子弟は親先祖傳來の汗と油の厚恩を忘れ、遊投し現在人は平素の準備と自己の努力とを忘れ今に何とか成るだらうと大きな夢を見て暮す彼の一種「蟬」日暮の如し、自己自身の缺陷を悟り、心の改革をなし萬物の靈長に恥る勿れ、化たる學文に囚わるゝ勿れ、化たる事業に化され

る勿れ、人は盜棒、火は火事との例に習ひ、想ひ患ふ勿れ、論ずる勿れ、一切の基は心なり、我れと我が精神なり、枝葉の義論に迷ふ勿れ、來りて求めよ、心靈界に去ば與へん安樂境、神は正しき人を救ひ、幸福を與ふ、此れ心信は徳が余る所以なり、悪心の者益々蛇道に沈む死地に走る嗚呼悲惨なるかな、其の狂體、

自業自得とは言え御同情に堪へぬ。

誠實熱心が資本神佛は善みし給ふ、誠とは眞實眞義、偽で無き事、正直正銘の事、人を欺がす親切の事、誠と言ふ事、祈る事が成就すると讀み、言ふとは、格言の言で祈るとは斤近しく示さる神が成りとは力が欠けた方に戈を加へて初めて成る就とは今日尤とめよ與へん。

實 まこと虚ならぬ事、偽無き事、善人に扮つ事、(イデタチ)

ウ (家)の母がとは慈愛の代名詞温かき心を以て育てた(カイ)貝が有た、即ち息(ソク女) 自の心自(親ノ心)を受け告ぐるを子息と云ふ鬼子とは自らの心に反する

子心鬼子と云ふ。

熱とは 幸を全部(丸ク)火を加へ熱す温順あたゝかき情と讀む。

心 とはコ、ロ、心とは、五臓の心、神君安寧なりと。

天照皇大神様の宜はく五臓の第一位の心、心とは天書で心と書く人間の中心点で有る右翼に非ず、左翼に非ず、中の心、中心、忠臣忠良なる國民で有り、人間の規準点で有る一度び規準点を失ひなば最早取り換へしの付かぬ地極に陥ち入るなり。イザ祈り求めん諸君御國の爲めに自己の爲に。

夢の世 夢の夜

夢の夜を 夢見て暮す、夢の世を。

覺めず覺とらず あわれ老の身、若ひ時は二度無ゐ、三度無ゐ、と白紙の様な無地純白の若ひ時に想ひ違ひをして、身放埒の天罰靦面年老て今更ながら苦世苦世し

たからとて自業自得と申しましよう、来た道を振り向て見る時、多分は身振ひする事柄が有りましよう、ああも、こふもと思たからとて追ひ付きもしますまゐ、悪魔が先廻りをして待つて居るのですもの、十里來れば十里戻らなければ、元の處へは納りますまゐ、凡そ人として嗚呼々々氣樂に成り度い安心仕度ゐ、皇皇と仕度と目覺て始めて神に祈り御佛の御慈悲を念するのが先ず大抵い普通で有りましよう、取り違の道に迷はず天照皇大神様、鎮守様、御守護神様に祈り求めなされば、それこそ力強き御加護を賜る可し、祈り求めよ、さらば與へん神様に御祈りし、御先祖の靈に念せられよ御慈悲に満たさるべし、今すぐ、あすと延すな、善は急げ、悪は延べよ、善を知りて行わざるは、此れ罪なり、勇氣以て神に祈れ、其の勢力を以て猛進せよ哉、決心して一筋に神の御前に平伏せ神様は與るん 祈の力、神の御榮。

天 運

人間には生れ落つると與へられた、運命が有る、第一天運とは先天的天命と稱し、其の天運天命を自覺すれば萬事順序正しく發達し穩健着實日と共に富貴、繁昌、平靜、順、最大好運、神通自在なり。

ふるに第二の天運を得納し幸福を開拓し、擴大し有意義に活用し、安心立命の境地至り理想的に實現達成する運命は心靈界〇山式信仰の奥義を極めるのが日常生活上必要で有る。人格を構成する皇道で有る皇道とはスメラノと云ふて神に近か寄る近で有る來り求めよ〇山は神佛二道の奥義を授けん、祈求めて幸運の人に神は求むるに與ふイザ祈らん。

運命は神秘 開拓は祈り 心なく神の

宮居に祈るとも など神々も 御座しざらまじ

は過去を省み、現在の立場行爲を考へ見まするなれば、自ら愛想の盡きる事、身の

毛の與奪の事が可成りに有ります。
 此の分で永い長い將來を歩む心細さよ。建設希望も目的に達成すると云ふ事を翼ふ事は随分無圖かしい事であると悟ねば成りませぬ、如何に犠牲を拂い努力すると雖も、與へられざる天命には捷ち得ますまゐ、即ち天運なり、神は倍の力を與へ賜ふと教へ給ふ、祓ひ給へ清め給へと。
 感謝の意を示し祈り祭らん……

人生の極意心靈界教

天地は其れ萬物の一大旅宿の如く光陰は又た萬代の去客に似たり、生老病苦は合の宿道中僅かに五十年活動芝居は之れ人生の縮小圖、實に現世は夢の如く亦幻の如くである。今日は昨日の日も無く影もなく一切が空である。たゞ今日の現在のみが過去と未來の中間に一切の生命を嚴存し、昨日を忘れ、明日は解らない、吾々は今日一日を生涯と思はづばなるまい、闇夜に迷つた五十年の人世も只刹那の悟りに依て長夜百年の夢

を破り、光明の世界に更生し、人間の苦と云ひ樂と思ふ心も二ツで無く、迷ふが故に苦樂あり、悟る目には十方障礙なく、喜怒哀樂、煩悶苦惱と云ふも畢竟これ如來の種子本を究むれば斷ずべき迷ひも無く、悟らんとする道もなし、「プラス、マイナス」靈である、宇宙は自體を保存せんとして雨を降らし、風を吹かし、早魃あり、地震あり、吾等人類に對しても随分慘虐もあるが皆自鉢擁護で人間の爲め、其んな少さなはからひは無い、萬事無意に行はれ、厭が應でも吾等一切の物を統一し攝取不捨して止まない、茲に言ふに言はれぬ有難たい物がある此の絶對力の發現が一面には吾人の智識となり、感情となり、意思となり、表に現はれて容貌言語舉動となる何事も裏と表の現る世の中死して五十年乃至七十年の身命跡方も無く夢と消へ、生れては六道の辻に迷ひて、自から我身を束縛し、四苦八苦の困厄が應て自己を向上し、小我を捨て、大死一番宇宙大生命に直感し合鉢して茲に意義ある人生を完ふし無窮の生命を獲得する事が出来るのである。

四四
左れば吾人は無益の自己思案を止めて一切を神に歸命して大自然に従て愛の本能を發揮し個性のまゝ我れを忘れて愉快に各自の天職を努力して共に天地の化育に参加せねばなるまい茲に不善の尊き一善が行はれる。既成教團の如く方便の文上理窟や辨舌が或る一面に邪心を増長せしむる因となる、如何に巧妙なる百千萬の言説も實行の前には議論である……心靈界教會が他宗に比して誇る特長は六ヶ敷い理論を一切抜きにして克く働き善く遊び能く休みて天地の動と静を調算し神意と冥合して誰れ彼れの差別なく愛の活動をなす爲めに神力加はりて自他共に健全なる心身に復活せしむるのである之れ今日の世相に適應しく全く時代の要求であらねばならぬ。
來り學べ心靈術を

大慈大悲 神通之力



山○井石主顯

心靈觀世音菩薩

心靈界の觀世音尊像を拜して

四六

天照皇大神の御心の働きが觀世音菩薩である。④の○は大宇宙の本鉢の靈を示し○の中にある心と云ふ字は宇宙の大精神と佛と融和した陰陽一体の理を現した宇宙の心を言ふのである其心を意譯して人格に現はしたものが觀世音菩薩の尊像である其の尊顔を拜するに男性の様であり。又女性の様にも拜せられ男女の風貌を備へたる陰陽渾一の活生命体である。其れが行に現はれ外に發して大慈の活動となり内に對して大悲の願行となる而して其の妙智力は三十三身の相を化現し時に從て自由無礙何物にも身を現はして一切世間の苦しみを救ひ給ふのである、常に隠れて靈界は實在し、陽に現れて神動を起して七難を退散せしめ、陰に隠れて悟道の智慧を與て貧、瞋、痴の三毒を滅除するのである。

偉大なる哉觀世音の威神力、吾人は天を父とし地を母とし無限豊富なる大愛の靈界に存生して常に其の恩恵を蒙りつゝあるのであるが其の靈界に實在まします眞の觀世音菩薩は何に依て其の姿を拜する事が出來やうか、肉眼を以て見る事が出來るであらうか又其の音聲を聞く事が出來るであらうか、觀世音は世の音づれを聞くのでなく觀ると言はれて總ての事から觀察する心の働きを言ふのである。

若し諸君が十數日食せずして空腹となり、今や精神は衰へ餓死せんとする時に一椀の飯食を與へたものがあると假定せよ其の食物によつて餓を凌ぎ、肉体の色を増し、氣力を回復したとせよ此れは食物の力ではあるが與へる心が無ければ如何に空腹でも例令餓死するとも食へる事が出來ないではないか、今其の食を受けた人は大慈の徳を頂き與へた人は大慈な願念を成就したのである。

此の大慈大悲の働きが眞の觀世音菩薩である。心靈界の信仰に依て死に類した大病人が救はれたと言ふ事も觀音慈悲の心が加はらなければ回復が出來ない、其の慈悲に引き付けられた諸君は觀音の思召に叶つた善因の人でなければならぬ、而して元の健康

四七

体に復活し苦しみより遁れて喜びの生活に轉向せられた幾多の人々は皆觀音の力を頂いたと言はねばならぬ。

左れば此の恩恵を体験せられた諸君は常に感謝の念を以て報恩の眞行を盡さねばならぬ。心霊界教會に觀世音菩薩を奉齋する心が既に觀世音であり其の觀世音が○山の心身を通じて絶對無限の威神力を示現して數多の病者を救濟し其の病者が普現の明智力に依て悉く救ひの光明に浴して感謝の日を送りつゝあることは實に尊い聖業にして大慈悲の働きであることを感ぜらるゝのである。

依りて以て來れ、心霊界○山の元に、來りて救はれよ、讀む人毎にと勸むる以所なり諸の苦惱を受んに南無心霊。觀世音菩薩と一心に稱名せば即時解説す。是れ菩薩の威神力によるなり。

若し害せんとする人有らば 南無心霊。觀世音菩薩の名を稱へなば、彼の執る刀杖段に壞れて解説す。

其れ南無心霊觀世音菩薩を禮拜供養せば、即ち福德、智慧を與へん。

愛敬する者には子福を與へん。

心霊觀世音様の御尊像 妙法、愛相慈悲心、多寶物、吾物となさん。此れ供養の功德なり、願處叶はざる無し。

南無 弘法 妙法

○懺悔文

我昔所造諸惡業。 皆由無始貪瞋痴。
從身口意之所生。 一切我今皆懺悔。

○開經偈

無上甚深微妙法。 百千萬劫難遭遇。

我今見聞得受持。願解如來真實義。

○摩訶般若波羅密多心經

觀自在菩薩、行深般若波羅密多時、照見五蘊皆空、
度一切苦厄、舍利子、色不異空、空不異色、色即是
空、空即是色、受想行識、亦復如是、舍利子、是諸
法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減、是故空中
無色無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色聲香味觸法
無眼界、乃至無意識界、無無明亦無無明盡、乃至無
老死亦無老死盡、無苦集滅道、無智亦無得、以無所

得故、菩提薩埵、依般若波羅密多故、心無罣礙無罣
礙故、無有恐怖、遠離一切顛倒夢想、究竟涅槃、三
世諸佛、依般若波羅密多故、得阿耨多羅三藐三菩提
故、知般若波羅密多、是大神呪、是大明呪、是無上
呪、是無等等、能除一切苦、真實不虛故、說般若
波羅密多呪、即說呪曰、羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅
僧羯諦、菩提薩婆訶、般若心經 (畢)

○本尊上供回向文

上來 般若心經 を誦誦す集むる處の修勳は

の三寶に回向す、伏して願くは四恩總て報じ三有齊しく資け、法界の有情と同一く種智を圓にせん事を冀ふ所は、家道興隆、災障消除、諸縁吉祥ならん事を南無十方三世一切諸佛南無弘法妙法。

○先亡累代回向文

仰ぎ冀くは三寶俯して照鑑を垂れたまへ、上來(經名)を諷誦す集むる處の功德は(法名)家門先亡累代諸靈六親眷屬七世の父母有縁無縁三界萬靈法界の含識等に

回向す冀ふ所は曠劫の無明は當下に消滅し真空の妙智は即ち現前するここを得、頓に無生を了つて速に佛果を證せん事を南無十方三世一切諸佛南無弘法妙法。

○四弘誓願文

衆生無邊誓願度。煩惱無盡誓願斷。
法門無量誓願學。佛道無上誓願成。

御佛供養之詞

ヲ守ラセ給ウ

一切ノ御佛南無弘法妙法
 切照明ノ御佛南無弘法妙法
 ラズニ犯セル罪咎過ヲ許シ給ヘ許シ給ヘ許シ給ヘヨ
 南無弘法妙法
 穢レニ滿チ滿タリト雖モ

念力ヲ以テ御佛ニ感謝シ慰メ奉マツル
 舌想至梵天自身無數光爲求佛道者賜此稀有事諸佛驚
 咳御聲及嘆辭御聲聞普十方國地皆震動六種佛滅度後
 克保此經諸佛悉歡喜現於無量神力云爾 慚愧懺悔六
 根罪障滅除煩惱滅除業障願以此功德 極樂往生ヲ成
 シメ給ヘヨ 南無弘法妙法。 二度拜禮 阿吽

昭和 年 月 日

オイ、其方幾何に猫撫聲を出しても駄目だゾ、汝の罪は汝自ら償へ、今は既に慈悲
 深き父母も最愛の妻子も救ふ事全く絶無ジャ、汝欲張りて蓄たる非道の財寶、横車の
 智位、傲慢の珍寶、今は何も個も更に益無し、不淨の汝悉く穢土成らざるはなし、
 汝の家宅全く火宅なり、今更泣事を言ふな、何をか叫ぶ、皆愚痴ジャ、コリヤ、靜に
 至せ此の鏡を見よ、此れ汝の成し來た仕業で有らう。

我昔所造諸惡業、皆由無始貧瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔。
 是の如く懺悔すれば必ず佛祖の冥助あるなり、心身の罪根銷滅す。此れが即ち威神之
 力、ゾヤ、外道より、正道に活歩せよ、堂堂と、去らば、與へん積功累徳、心願成就
 せざる無し、先ず人を救へ、萬物を愛せよ、報謝我が身に集まる、實に六根清淨な
 り、天地の神止同根奈利、故仁萬物乃靈長奈利。願處叶ざる無し、わかつたか、地
 獄、極樂の分れ道。地獄の道は八方に有る行き度い方に オツバシレ カツ



五七



五六

五八
君國の大恩を忘去し、師を師とも思はず、恩を仇で返す不届者、慾に目が呉れ、屁理窟を並べ立て人に煮湯を吞ませた天罪に依り汝の咽喉に此の熱湯を吐込む覺悟致せ、ドウシヤ熱ひか苦るしむるか、人を苦るしむれば汝も其の通り苦るしむのじや、人に喜びを與へなば自身即ち喜の徳を得らるゝのじや、少し計りの智慧を振り廻し、欺詐的行爲誠に其罪重し、一寸先は眞の暗では無るか、弱き者を輕蔑ては窮地に落し入れたる罪に依り、釜うでの罪を加ふ。煮返る其残酷本職も同情はするが今更手續の方法も無る、汝の罪は汝自身煮返されるのちや、ペテンの行爲益々憎む可き奴なり、石固漬に處す。身動きも成るまゝ我が身を抓て人の痛さを知れ、チャン／＼バラ／＼同志打の追刑を加ふ。弱わ者いぢめ、強き者にいぢめられ、盲目目法擡に逃ぐるど千丈の谷に突き落す、目が廻るぞ、けんのみを喰せた罪に依り、谷底に劍の千草が鬱蒼と生え繁つて居るぞ、足の裏に突き差すぞ、身動きも成るまゝが、ジャケンの汝大蛇に



一呑にされてしまへ カツ

此奴中々嘘を付き居つたな。イエ決して嘘なぞは付いた事は御座いませぬ。何に嘘を付き居らぬと申すのか、よし舌を出して見よ、此奴最早や嘘を付き居る、此の舌の長き事鋭く尖て居る此の舌で嘘を付かんと申すのか實はほんとうの事を言つた事が無いと申すのか、然らば其方先月一日何が自己自身の良心に違判した事は無いかな。ハア御座いませぬ。必ず無くと申すのか。ハイ。其ならばこちらから言ふが、先月一日御店から手金をタンマリ受け取りて置きながら、仕事は更にせんで無いか、ドウチャハイ其れは其の何で、何ンチャ、ハイ其の手金を御店から頂きまして、材料屋に行く途中、一寸一パイの看板が如何にもよく出て居るのに連れ込まれまして、お酒を一寸一口呑むつもりで大酒を呑み、ウカ／＼と悪友の誘ふ儘に打つ買ふ呑むの三拍子目が暈ると同時にもう一毛も御座いませんでした、其の何で今はこうして身動きも成

す冷極きはまる鐵の棒に縛り付けられ御店問屋向からは約束違判の攻苦に、あやまればあやまる程、昔の檻樓が後から／＼出無くてもよい檻樓の奴が澤山出まして口質を取られ、自分ながらよくも嗚呼した嘘が言へたかと獨り寒心に堪へませぬ其爲め一言の言譯も立つ、身は瘠せ劣へ火の車に乗せられ、がら／＼がらと身の毛のよだつ悲哀、恐ろしい、地獄に引かれて行くので御座います、何卒御助け下さいまし、御情で御座います、苦しい苦しい、嗚呼苦しい、居ても立つても居堪らず、外に飛び出せば酒や、炭や、米やに針の山に追ひ込まれ、家に駈込めば女房子供が飢たる蛇の如くに攻め立てられ、表戸を締むれば、裏より家主が今日とは云ふ聲が恐ろしく聞へ表を開くれば執達吏に大きな塔婆の様な名刺を出され、金策に國に歸れば親兄弟より強意見、烟り立つ火の御飯は咽喉を通らず、兄嫁が驚ろしい蛇の面に見る、音も無く切り切さまれる鋸、出齒庖丁又は百貫目の鐵棒で張り飛ばされ、自業自得とは云ひ乍

ら、嗚呼、如何にせんか、南無天地八百萬の神々様、御慈悲の御佛様、南無弘法妙法を與へ賜へよ、南無弘法妙法。一心天に通じけん、合掌する者よく天に通ず、神は求むる者にのみ與ふ、汝の信仰汝を救ふ、神は信、信の力を與ふ、祈りの力又威大なり。

六根清淨之大祓

天照皇大神乃宣久人波則天下乃神物奈利須掌靜心波則神明乃本主他利莫令傷心神是故仁目仁諸乃不淨乎見心仁諸乃不淨乎不見と教へ給ふ。又御佛のお經には

- 1、是故空中無色無受想行識。
- 2、無眼耳鼻舌身意。
- 3、無色聲香味觸法。

始めの行は悟で有る、悟とは一言に言へば、有無を超越し自己自身に恥ぢず、清淨な

る事を自確し神髓に達すれば、生滅無く迷無く、火中又尙涼し世想も何らラヂオの一曲に過ぎず、此れ即ち無眼耳鼻舌身意なり、六根清淨なり、六根とは眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根の事で識の發動の根元で有るからで有る、根は能く識を生ず眼に大小黑白を認識する、あの人は眼識が高いと云ふでは無いか。耳に諸々音聲を聞きわくる、鼻に種々の香臭を嗅ぎ分くる、舌に甘い鹹い苦い辛い酸い五味を味ふ。身に暑さ寒さ痛さ痒さを感ず。意に是非善悪思慮分別する。例へば目を覆ひなば如何なる美しい色も見えず。耳をふさぎなば何な麗はしい聲をも聞く事が出来無い。以下同じ祝詞では方

- 1、須掌靜謐心波則神明乃本主他利
- 2、莫令傷心神
- 3、是故仁諸乃不淨乎見心仁諸乃不淨乎不見

1、は天照皇大神様は 須からく神の掌手の平に乗れよ手の中に居りて静かに静まれよ、謚る心 其の 心が神の心で有る。

2、心神を傷しむる勿れ 御前方も神にも心配苦勞を掛けるな掛けさせてくれるな

3、どうせ世の中は大勢で暮らして居るので有るから第三者は諸々色々の不淨を言ひもするで有らう、又思ふで有らうが、自分の心のどん底には決して少しでも不淨の事は想ひもしないびくともしない、かんともひくか無い、其で有るから此時仁清潔與幾偲阿利。 潔とは甚だ清し、汚無し、卑劣の念更に無し、潔白なり。 影止像の如く、影とは影法師、お影、すがた、元像、像とは元形、元形正しければ影正し。 清く淨禮波假仁毛穢る、事は無い。 良き花より良き實を結ぶ、此れが六根清淨で有るからで有る。 無眼耳鼻身意、六根清淨で有れば、五臓が安寧なり、五臓とは心臓、肝臓、肺臓、腎臓が安寧となる。 此の五臓が安寧なるが爲めに、天地の神と同根で有る、其

で始めて萬物の靈と同體で有るが故に願處成就するので有る。
 ナア祈りましょう一サンニ、皆様、御一所に祈りさせて頂きましょう。

南無之一言

南無の一言が即ち悟りである。南無とは無上である。

南 皆身 無し。身は欲である、身の欲を捨て、始めて聖人と成る、良心とは靈である、靈とは命で有り命で有る、命とは生神である。此の心靈界信仰(眞行)者が生神の分靈で有る事が明瞭する、ハツキリと我れは神なりと深く深く信じ得らるゝので有る。己が心の(忌)の外に決して索むる勿れ、淺墓な智慧煩惱に囚はれる勿れ。無垢清淨の大智と成り、物質界より精神界にと進め、大神様の大廣前に祈り進め、三世迄も救わる可し。いざ祈らん絶り求めよ、靈光、靈力の御力に、朝夕に、顔と手足を洗

ふように、心の垢も抜ひ清めん。

山と山 高くそびるし 谷の花

さそう嵐の 気づかいもなし

人生の最大幸福は後悔無き人。

人多くは、今日に成りて、昨日の事を後悔し、今年に成つて昨年の事を後悔し、年老て若き時の事を後悔す、大抵の人が後悔を繰り返して居る様なので有ります。顧りみて何の疚しい心無く、自分の行爲に一點の改むるべき必要無き人は、實に幸福の御方で有ります。何に不足の「心づかい」なく暮らし度いと翼ふのが希望で有り、又人生最大の美德では有りますまゐるか、然る處、何にたとへんか、自稱事業家と致しますれば、失敗に失敗を重ねて居りながら、性も疑りも無く、借りる時すでに拂ふ豫算無く元より考へもせず、只々、成功の夢見て、日一日と、苦勞の娑婆に大急ぎで走りつゝ

有るかの様に思はれます。一日と申しますれば、生涯の心なので有ります。一日、一日と安樂に暮らしますれば、即ち一生涯氣樂に暮らせる譯では有りませぬか。人には生れ落ちると同時に與へられたる前世の約束の徳が有ります。力強き、根強き、根氣よく、膽練修養して、人事を盡くして、天命を待つのが悟りで有り、決心で有ります。天命とは、神様の御名で有ります、神様は自らを助くる者を助くと教へ給へり。又人を助けて我が身助かる。御愉により、勇氣を心身に充滿し、慈善の行爲、愛の心を兩手に握り、祈り求むるなれば、なぞか救ふべき、神様に責任有りでは有りますまいか。かかる上からは何と一點の後悔なき、日本人らしき、眞の大和民族の大精神であり、誠意の賜物成らずや、後悔無き様、一身一家、御國の爲め、祈り求めん、大神様達に必ず與へ給ふ、神秘の御力、後悔なき最大の幸福を。

附言

右の文章を読んだ某氏云て曰く。後悔する人が幸では有りませぬか。石井「然らず、後

悔をした人はすでに良く無い、一たん失敗した後の祭りならずや、其人が再び後悔を繰り返さぬ人で有るなれば、其れは幸で有るが、たいていの人が悪い事のやり直しをする人が多いので有ります。此れに引き換へて、恥無き良心に何で後悔する處が有りましようや、後悔無き人こそ實に幸福のお方です、如何ですか。某氏なる程ナア、よく分りました、其の通りデスナア、と只々感極まり喜びけり。

開運

運よく成り度いと冀ふ方は、おはこびなさい、神様は求むる者に與へ、即ち運を授け賜ふ、運とは、はこびと讀む、はこびとは、靈拜で有り、祈りで有ります、運は練つて増せと言ふ事を、いつの世にか運は寝て待てと誤傳され、今に良い事が有るだらう運は天に有り、ぼたもちは棚に有りと随分虫のよいお考へです。やがてそ言う方には天運を待たんとして、寝て居たら破れ家屋からすゝが目の中で、目がつぶれましよう。

う、ぼたもちは棚に生る者では有りませぬ、のせて置いて初めて、ぼたもちは棚に有るので、人様が棚に上げてお置きに成りましたぼたもちは人様ので、私しが頂く譯には參りませぬ、運は天に有りととの古語は、天とは神様の御事で、神様に祈り求めますれば、運をうんと御授け下さいまするので有ります、開運の近道は祈りで有ります。サア祈りましよう。

安心立命長生きの秘法

國が違へば詞も變る、一人一人に心も變る、不平不満は地獄の宿屋、火攻め水攻め鬼共攻める、心の攻苦を懺悔して、改心すれば罪滅ぶ、清い心と成り元氣(生レタ聲)あふるゝ、此れが即ち助かる早業近道で御座る。

晴てよし曇りてもよし富士の山 元の姿は變らざりけり
思ひ様でおもしろい世の中、人間と云ふ者を願れば樂しき身の上、吾は唯だ足る事

を知る。

燧

小サナロ

燧

丁度ヨイロ

燧

大キナロ

吾れ唯だ足る事を知ると云ふ事を悟り知る人こそ誠に幸福の人であります、此の字は銘々に皆口を以つて居るやうに、人間は此の口と云ふ者が最も大切で有る事知らねば成りませぬ。口は禍の門、雉も鳴かずば打たれまい、口を慎めと云ふて、おしやべりするばかりが口を慎めでは有りませぬ、言はねば成らぬ事を言はぬも慎しみの一つ。食ふ者も腹八分目、食ひ過ぎ、呑み過ぎ、慎みましよう、其が即ち悟りで御座る己れ自身を知る人こそ幸で有る、一升袋は一升入りで、貳升は入らぬ、蟹はこうらによりて穴をほる、此れでこそ安心立命長生きの法。サア皆様、祈らして頂きましよう、日本主神の天照皇大神様に、御守護神様に、御佛様に、御先祖の御慈悲にすがりましよう、今、すぐと、サア祈りましよう。

苦勞の勝利者たれ

明治大帝御製に

神こそは野をも山をも作りをけ 人に誠の道をふめとて
世界大陸に高い處あり、低い處あり、小さな箱庭でも、高い處、低い處とありて、ヤア、良い箱庭だ、上手に出来ましたと、賞賛するでは有りませぬか、家庭にも、各人でも、良い事も、悪い事もありません、何事にも、不満、不足の想ひをして、クヨクヨ泣き事を言ふ人様こそ、誠に御氣毒に存じます。神様は、神の心に、もたれつき寄り籠れ、心は、安心と喜びとを與へん。然らば始めて氣に樂を生じ、身體は健康と成り、家業は繁昌し、家内は圓滿となる、と仰せ賜ふ。なんと御慈悲の御言葉を下さるでは有りませぬか、日一日と安樂な一日を迎へ、一日を送りますれば、其人こそ幸福の方です。神様は、又、勉めや勵め諸共に、神は倍倍の力を與へん、と我々に力強

い御示しを下さいます。サア皆様心に、心配ある方、失業の方又は御病氣の方、失望の方、不時の災難に、お遇ひなさいました方、心をきなく祈りましょう。此の世をば始めた神の事なれば、世界萬物皆我が子なり。と、お聞かせ下さいましたからには、皆様一度是非私の處に御出下さいまするか、又はお手紙を下さいますれば、私の方より御伺ひ申上げまして御相談させて頂きます。むたな御心配遊ばすな、是非御遠慮なく、御申込を御待ち申上げます。大勢様御誘ひ合ひ御出下さいまし。

大山神靈界に於て

諸君私しは茲に親しく諸君の御前に聊か所見を述ぶるの機會を得たことを、非常に欣快とする者であります。現在の世想は必ずしも平易で有るとは考へられないので幾多の困難は眼前に横たはりて居ります。爾今尙益々多く成らねば良いと心配に堪へないので有ります。地方の疲弊、中産階級の困憊、産業の不振、失業者の續出と一口に、

政事家、學者等を始め、智慧の有り相な格好をして駄辯を弄し、筆をそろゑて書き立て、居るが、其れは即ち日本國體の眞價を知らぬから有る。思想の混亂と云ふは大和魂を存せぬから有る。世相の險惡と云ふは日本人道徳を知らぬから有る。只徒らに西洋かぶれして、日本古來の武士道を忘却するから有る。日本史實關東震災、神世を忘れ神を祭らぬが爲め神祭の余惠を示し給ふに有らずや。多事多難に遭遇して泣き面の人に於いては心細きかざりに有らず、多事多難は帝國の發展の門出の尤も祝福すべき前兆成らずや。

うき事のなほ此の上につもれかし かざり有る身の此の身ためさん
と古歌を聞くに及んで、身はたとへかざり有るとも、精神はかざり無し、靈力は無限なり。七度此の世に生れ来て、と楠正成公を始め「高山彦九郎」近くは廣瀬海軍中佐も云われて居られたと云ふでは有りませぬか。神武を祈り奉り、此の難局に一進

一步大神達の御守護を祈り奉らん。御國の爲め、世界人類の爲め幸福の道を開殖せん

七四

國難打開は

机上の空論に過ぎぬ。聲は大きいが實結（御法。佛の警）が更に無い、其れは團栗の背比で有るからで有る。人間横車の智慧くらべ、階級と服装と甚だしきに到りては黄金力で人の心を自由自在に出き得る者なりと、不埒極まる夢を見て居る心得違の淺薄な人々があるからで有る。人間は人間以上の真に力強き神に縋り、先祖の靈を懇ろに佛ひますれば何事でも立所に解決出き得るので有ります。人多くは現在の不況は世界大戦後の好景氣に酔ひ贅澤に流れ舶來品を望み輸入超過なりと云ふが、決して其れが經濟の行詰りなりと云ふは甚だ早計で有る、なる程表面は其で有るが、根源は日本人の魂を失ひ大和魂、古來の武士道、神の子で有り分靈で有る事を忘却したからで有る。天地の恩恵を忘れたからで有る、現に師の恩なぞの事は更に考へて居らぬ學

校の生徒が先生を追ひ出す騒の如き、工場の争議等々毎日々々新聞紙上に見聞きするあらゆる事柄がどうで有らう、此れが人間業で有りませうか。凡人の目に伏し拜む事の出來ぬ神様や佛様は一ツの飾り者と心得て居る、飾り者ならば何故に村々に到る迄鎮守様を御祭申上ぐるか、此の上も無き不經財な事では無いか、飾り者ならば一層止めてしまへ。否、否、そうで無い捨て見よ止めて見よ、天下、廣しと雖も皆神様の御支配下ならざるは無き者なり、普通人の目に見えぬ、又拜む事の出來無い神様の御存在を吾れはたしかに拜す、信せよ諸君、大神を念せよ御佛を。いざ祈らん。諸共に吾が身の爲め、國恩の爲め祈り求めん。

變らぬ心

不變の心一筋に何時も珍らしい人助けをするが爲め、社會の人より問題にされるが自己自身が修行をして神様に縋りさへすれば、何人にも神様の御めぐみを頂けるから誤

七五

解がとけるので一層強い信者となり、其人其人の信仰の徳に依り、大神様達がそれからそれと珍らしい人助けの方法の御力を下し置かれて、自己の助かる事が言ひ知れぬ廣大に感謝が出来ます、祈りすがれ。

善 悪

善を知りて行ひがたく、悪を却くる勇氣もなき人間は弱點の持ち主で有ります。人格は善、職分は忠、此れが人間最大の美點で有ります。かゝる要點の解決は信仰(眞行)の力を待たねば成りませぬ。己れが犯せる罪を悔改め、御守護神様に寄り縋る時は眞に過去の罪を赦し給ひ、加ふるに心に安心を授け勇氣を興へ、善行に進み、悪業を平げ、成功に躍進する勝ち道が開かれるので有ります。殊に指導被下る諸彦は専ら勇氣を以て人を救ふと云ふ職責は忠實であり善行せられん事を祈る、安心の善徳はいつも何事に依らず満足する故、人を羨まず、人を嫉まず、人に誇らず、人に高ぶらず、自

らへりくんだり、五臟清く、心神を痛めず、以て即ち六根清淨なり。祈れ神に、念じよ佛に。以忠孝 報天地恩

玄米を生で喰ふ理由

米を搗て白米と云ふ、米扁に白の作りで粕と讀む、人多くは粕を喰ふ、米の皮を糠と讀む、米の糠は糠に有り、榮養は糠に有り、故に玄米を喰ふ以所なり、火扁に欠で炊と讀む、火を少なく燃すを良しとす、燃す事少なき爲め榮養發散せず。

自力更生

此の自力更生に就いて私しの意見を先づ三通りに御話して見度いと思ひます。第一は自分の力で更に生きよ。親が子に向ひ、お前は親よりも偉く成れ、偉く成れと養育するから子供等は親よりも

偉く成れるつもりで一擲千金の夢を結び、金満家に成らうとして山を張り見事失敗し、一夜乞食の悲運となり、政治家たらんとして道を踏み過り刑務所の御厄介となり、學者たらんとして神經衰弱に落入り、女優たらんとして淫賣となり、茄子の木に瓜は成らず、蛙の子なる事を忘却し、甲羅に依りて穴を掘らぬ蟹、十貫目の力を持つて百貫目の要求をし、更に生きんとする意志こそ自らの力を知らざる死人の如し、始めより生きて居るなれば敢て更に生きる必要斷じて無し、故に第一は失敗の人たるなり。第二、百貫目の力を以て生れながら十貫目にて満足げな顔つきをして居るは此れ又死人の如き半端人足なり、此れこそ更に更に生きて國家社會の爲めに働くべき天職ならず哉。第三、人は自己に恥ざる行爲行動を行ひ以て満足して樂しき朝を迎え感謝の夕日を送る人こそ萬物の靈長なり、眞の人間生活なり、安心は平和を生み、平和は満足を生ず満足して始めて健康體となり長壽となる、此の秘法は獨り信仰の力有る

のみなり、我れは神の子なり、祈れよ神に、求めよ神に、絶れよ神に佛に。結論第二の諸君大神様の御前に一大御努力を要望す。己れ自身を知れ。

望 成 功

人萬人成功を望まぬ人が有りませうか、あの有名な歌で

沖の暗いのに白帆が見ゆるあれは紀の國みかん舟

と云ふ歌の主人公紀の國屋文左衛門と云ふ方の御成功なさいましたのは、林長五郎と云ふ武士上りの支配人が居られたからで有ると云ふ事です。林長五郎を紀の國屋文左衛門が支配人とした理由は、林長五郎と云ふ人は毎晩夜中の二時に飛び起きて高い物干に上りて天を仰ぎては獨り點頭、應答して居られた、其れを紀の國屋文左衛門が又非常に信じ敬意を表し、むしろ恐れを以て貴とんで居られた、明暦三年正月十八日本郷丸山の本妙寺から出火して江戸大半を焼き盡した、あの恐る可き振袖火事、天空

火氣に依りて林長五郎氏此れを覺り、山地に急行して材木を買ひしめ見事大儲けして紀の國屋が材木資金壹萬兩を投資して一躍百萬兩に成さしめたるは林長五郎様の信仰神の御恵み、神様の御慈愛、天徳の外ならじと深く信ずると共に、一層信仰（眞行）の御徳を以て御守護神様を心より眞服、心服し、誠心より祈り奉つらん、地變は天に寫るとか又は天色に現はるとかや、水害の起る時は天水色をあらはし、火災の起る時には天火氣を生ずと聞く、林氏の天徳を得たるは天火色を見出したり、御影、御影、お影様に成りました、お影を頂きましたとか嬉びの人の御影話し、不幸の人は影がうすい長い事は無いネト云ふ如くなり、神信は徳があまり。

安心の祕法

私がこんなな安心の出来る様になりました祕法を公開致します。凡そ人間として心配苦勞の無い人が有りませうか、誰方とした處で皆心配苦勞が有りますよ、私しの

心配苦勞といふ者は、其れは大變な物です、其れから其れ、此れから此れと日を追つて新しい心配が殖て来て、古い心配と新しい苦勞で混線する様な場合が毎日毎日殖て来るのです、其心配苦勞より安心の道を見出し開拓致しました。今日は心配苦勞は一つも無く安心と嬉びの中に人間らしき朝を迎え、夕日を送る事を得ました事を感謝せずには居られませぬ、此の嬉びを一人で獨占するのも勿體無いと思ひまして公開致し皆様に御傳へいたしまして毎日毎晩大勢の方々が御越しになります。初め御訪ねの時は不安、心配、病氣と云つた風に御氣の毒で御同情せずには居られませぬが、二度が三度、三度が四度と重ねるに連れ、安心と嬉び、健康と元氣に漲る其御勇氣を見る私しの樂しみは譬へ様が有りませぬ。安心を得た私しは皆様にも何とかして御安心の出来る道を御相手を致す事のみ嬉んで考究して居ります、幸に大勢の御訪ねを御待ち申上げます、尙古い方々に御願ひは如何したら多くの方々を救ひ導く事

が出来ませうか、私に御教へ下さる事を切に望みます。

神國の民草に生れた

私しの光榮、私しは神様の子で有り分靈で有る事を認識し、御守護神様の御恩を報ひねば成りませぬ大責任を感じて居ります。身不肖なるが故に、到底御満足の御勤めも行も出来得ませぬ事を第一に御詫び申上げねば成りませぬ。只御君に忠、無き親に孝を以て(天)(神)(地)(佛)の御恩に報ひ度い決心で日夜天照皇大神様始め奉り御守護神素盞男之命様に御奉公申上げる喜びをせめての御恩報じを感謝致して居ります。信仰を始められて、嬉しい事と、周囲より困まらせられた御實證を御話し下さいますし、氣樂になりませよ、心靈界の皆様、皇皇となり吞氣に成り、重荷をおろした様に、肩の張るのも胸のつかへるのも清々させませよ、のんびりと人の事柄など氣に留めずほがらかになませう、氣持のよい氣分になりますのは只實證の一言に有

りです。

施 する人に成りませよう。
される人に成りますまい。

二人で食べる者を十人で仲よく頂ませう、氣持よく頂だけば肉となり血となり、元氣よく成ります、摘み食ひをすると吃逆をする、内證の事は隠し切れぬ、神様は見通し。

幸 福

人生の幸福は各人の健康にあり、各人の健康は安心と氣樂にあり無駄な心配を除き大元氣に働くにあり、元氣に生き勇氣に満つる我が樂しき團體、死人の如く幽靈の如く青垂れ悲感心配する人は來り求めよ。湧き出ずる喜びに更生すべし、周章狼狽して益なき無き犠牲を拂ふ勿れ、貴重なる生命を犯す勿れ、喚起せよ、限り無き精神力満せよ希望、幸福に生きよ、來り求めよ、心靈界に、

陽氣たれ

心霊界員は陽氣たれ元氣たれ、横から見ても堅から見ても、前から見ても後から見ても、生き生きたれ、活氣たれ、太陽が丁度世界をお照しなされる様にすみくまで陽氣たれ光り輝け。然らば病氣、悪魔は退散し、たへず小歌の小春日和昔の手ぶり（元氣）忘るな夢（神の御慈悲）元氣の者に悪人なし。潑刺たる元氣總てを征服す。

わが國は神の末なり神祭る

昔の手ぶり忘るなよ夢

照り渡る暗さにまよう人心

皇御神に祈り祭れじ

益 裁

益裁を上手に作るには枝を切り取るのが秘訣で有る、生花を生けるのには鉄を入れるのが肝心（甚）です。金を溜めるのにはもうけるより一たん自分のよところに飛び込金を無駄づかひせず大切に拜み奉り守護致しますればいやでも金が溜ります其溜た金が友達の金を連れて来て鼠み算に溜ります。人もし幸福に暮らし度いと翼ひ願ふなれば信心です、處が只徒に八百萬の神様を拜みたをしては駄目ですネ、自分の守護神様に寄り纏るのでなく神様は喜んで幸福に暮らせ、安心が出来ます、神様は倍の力を與へると仰せられますから壹錢神様に御願すれば貳錢拾錢神様に御願ひなされば貳拾錢と云ふ風に御守り下さいます。一圓損をお掛けに成れば二圓の損が舞込みます。私しの實驗を御話し申上げて皆様の御参考までに無駄な心配せず、心に安心を求めましょう。

心霊界の健康法

八六

物事に頓着せず、澤山食はず、澤山働く、心持ちを（苦世せず）嘸（女が又口を出す）、元氣で（生聲）でサツバリしましよ、昨日の事は昨日で終り、明日の事は敢て考へず其日其時の事は新智慧を出し、人一倍を、吾十倍に働き百倍の智慧を出せ、其れが日進月歩運命の開拓なり。

祈 禱

祈禱とは神様に御願する事、斥示さる 壽 南無とは昔より東西東西と口上師が云ふ東と西とは角力取り又は劍術使ひ等の闘士が東と西に別かれて勝負を決する故に、争の方位を示すので有り北は北無（キタナイ）と讀む（キタナイ）などと云ふ事は御互にいみさらう者です。其處で南無と稱へますれば南ミナミと云ふ（皆身）無く靈魂のみと云ふ美しい永久的の言葉で有ります、南無とは自分より上位を差して祈のる心、立心

扁に吾が悟り、己の心で忌となりませす。天上の人と成ると云ふ意味です、南無天照皇大神様御守護神様一人一人をお救ひ下さいと祈禱いたします。サア祈りマシヨウ。

勸め度き事

- 一、人様に安心させる事
- 一、醫者行者又は鍼灸も病人第三者の氣隨にお任せする事
- 一、自分は自分の御守護神様に一心に御祈りして御病人の一時も早く全快せらる、様相務む可き事

そをうまく

行くと思ふな

世（夜）の中を

月の丸きも

一夜なりけり

八七

月と云ふのは、お月様ばかりの事を云ふのでは無か。一ト月、日ト月とも云ふので有る。十五夜もよし、三ヶ月も又よし、よく見る人心、悪く見る人心、大嵐のあと澄み渡りたる大空に満月を眺むる風情もよわし、雲間より一寸三ヶ月様を拜むのも又風流でも有る。桐一葉を照す、月のさみしさ、水色の月にそよ吹く、秋風がのこりの柿一ツ照す、淋くも風情でも有り、風流でも有る。

搖ぎ無き大家高樓もよし、賤家伏家も殊によし、荒れ朽る古寺で夕暮に、ボーンと時を次ぐる鐘の音、算へ来れば限り無き、宇宙の現象猛き勇ましき武將の五月人形の出立、花の様な乙女、三月雛の花形、強さも弱さも、其の特徴に値價の備る者で有り、ます善い事が良いに成らず、悪るい事が悪しき事にも成らず、心一ツの想ひ様、……病氣にでも成ると困るからせめて百圓も蓄めようと思て、百圓蓄ると百圓かゝる病氣成り、百圓貯ると百圓、災難に罹る、此れに引きかへて老後の樂しみ、貯金は老後の樂しみと成り、御詣り貯金は御詣りが出来る様に導かれ、人生僅か五十年樂しき一日

が樂しき生きがいの有る五十年の人生、嬉の種蒔、美しく咲花、聽て幸福の實のり、安心が長が生の秘法、此れが心靈界の神秘信仰法、眞行法、神佛の御靈驗、讃め奉る諸君來り絶れ、いざ來れ、神の御前に、御佛のひざ元に、祈り求めん、幸福の道に。

格の通りに候也

まじめの人は、まじめの商賣を致します、人を疑る商賣を成す人は、人を信じ無い、尤も人を信じたのでは自分の商賣が出来無いかも知れませぬが、人を信じ無い人は世の中を信じ無いから、自己も信じられ無か、萬事萬端不安の行をのみ考へて居る。從て行が不安で有るが爲め人を落し入れ最後に自己自身が自己の落穴に落ち入るので有ります。其で信仰とは人を信じ人に歡迎されると云ふ事で相信じ會ふ美德で有ります、其で有りますから其人の職務に依りて余程考へなければ成りませぬ。眞面目の方は何を言ふても信じて下さるし、信じて下さるから、こちらも安心して取

引も出さずするし、交際も出さず。相互に相當の結構な幸福が舞ひ込みます。相當と申しますれば分相當、元金相當、勞力相當と申します。「處が君、此の仕事は相當に儲かるナアと云ふと、無資本で口先一つで何萬圓も儲かるかの様に思ひ思われるのを相當と考へて居る不埒極まる者が御座る、相當悪い者共で有る」先ず先ず人は人を信ずる職業を選ぶ必要が有る。色目鏡で見らるゝから尤も氣をゆるしては成らぬので有ります、注意すべき事でありませう。

一層の事交際しては成らぬのであります、遠ふ廻はしにだましたり、すかしたり手をかへ品を換へたり交際をする人、取り引きをする人、職業をした人、とは斷然交際せぬ方が得策である、君子あやうきに近かよらずであります。

素直に世渡りする人こそ誠に幸福で有ります。吾が心靈界同人は此の点に尤も注意して後悔なき様御注意致しませう。

神動を生活の上に顯現せよ

神動は神の姿、即ち眞の現れである、心の眞相で有る、此の眞實が縁に觸れ時に應じて一切の事物に顯現れ給ふのである天に在つては日、月、星、地上に在つては山、川、草、木、人類は申迄も無く、禽、獸、蟲、魚に至る迄。神は其の眞の姿を現し給ふのである。此れを哲學では眞理と言ひ、佛教では眞如と言ふのである、今一本の草花を取つて見よ、たとへ野邊に踏み闢られた名も無き一本の草花でも何んとなく見れば見る程微妙な所が有るではないか、造花が如何に立派に巧妙に出来て居ても見れば見る程氣がさして來るでは無いか、此れ一本の草花には眞がこもつて居り天地の生命が其まゝ現はれて居るからである。松は緑、桃は紅これ幾千來變らざる姿で此の變らない其まゝの姿が非常に美しくいではないか此れ眞理の現れであるからである。

一体悟りとは何んですか、柳は緑、花は紅、雨の降る日は天氣がわるい親爺。わしよ

り歳がうへ。鶏素足で、蛙は赤裸。此れ平常の事を悟るのである、皆其まゝの姿の中に深い意味を悟ると云ふ事である。其の個性の中に無限の意義がある事を悟るのである。野邊に咲く一本の草花にも、路端にある一ツの小石にも天地一切の物が互に相關係し一切の條件が共に融け合つて現はれて居るのである、随て一本の草花も一個の小石も全宇宙と同じ價値を備へて居るのである。そして其れ等も皆尊い神の眞を宿して居る事を悟るのである。

斯の如く天地自然は眞を其姿に現し給ふのである。況んや人間の心身に於ては不斷に回向して其の眞を現し給ふのである。私共の此の不完全な肉体でも神のお宿をして居る神はこの私共の心を樓家とし此の體を活動の舞台として自由自在の活動をして戴くのである。

信心と言ふも、信仰と云ふも、要するに神の存在を悟りて其の眞實を生活の上に實現する事が即ち眞行であります。神の眞心が私共の心に無疑の一心として現れ下さる事

である、繰返して言ふならば其の眞實が私共の心に領解したのが眞實の信と言ひ私共の身に現れたのが眞行と言ふのである。斯くの如く神の誠を身に受けた私共の日常生活は時と所と事柄とに依て其れ々々自由自在の働きを現し給ふのである。私共の心に宿つた眞實は表に現れては忠、孝、仁、義、禮、智、信、勇氣、節制、忍耐等の徳と成つて働き、人に向へば仁となり、主に向へば義となり、事に處すれば禮となり、事を究むれば智となる。夫に對して貞節、妻に對する愛情となり、變に極るや勇氣となり、事に對する忍耐となり、時には愛兒に對して責檻の鞭ともなり、良友に忠言ともなる、眞行とは何れの方面に對しても斯くの如き行となるものである。科學文明の霸王とも言はるゝ電氣の應用が元一ツであつて其れが時と場所と事柄に依て様々な働きをする、乗物に應用すれば電車となり、話しに應用すれば電話となり、手紙に代用して電信となり、夏は旋風器に、冬は炬燵に、動力にも燈明にも少しの差障りは無い平等なる神の眞實が差別の人類世界にも又此の様に無碍の働きをして居る

のである。眞實は何物に宿つても能く其自性を生かし、其の特徴を現はすのである、男子には男子の特性、女子には女子の特性を現はす、自然の現象たる柳は緑の特質を發揮し花は紅の特質を發揮する如く而かも其の各々が個性特質を發揮すればする程其の色彩が鮮明となり、紅、黄、赤、白、紫、青相亂映じ、相背馳し、相調和して少しの障害も無く通達無疑全体之美を莊嚴するのである。各自の神動を体験せる心靈界諸氏各威力を發揮し眞行を日常生活の上に實現して人生を美化し本界をして益々光輝あらしめん事を望む。

因縁果の問答

宇宙間に存在する何物に對しても關連する天の法律殊に人生に於ける吾人の一舉手一拔足一刹那として因果の關係を離るゝ事の出来ない。現實に善縁に善果惡因に惡果又善因に惡果惡因に善果此の四種の法則を諸君と共に研究して見る事は吾々處生上誠に

緊切なる事柄であるを感じ一の因が時と云ふ縁に觸れて其の果を生ずる事を問答的に説明して見たいと思ひます。

【問】 因とは何んな物でありますか。

【答】 因とは種子であります、此の種子の中には無始無終の生命が實在しある事を認めなければ種子の價値が判明しないのである。

【問】 其の生命とは何んな意味でありますか。

【答】 其の生命は無形であつて具體的な説明は出来ませんが吾人の生命とも連絡結合して居るのであります、宇宙間總ての現象が因果律に因て出来上つて居りますこゝに地中に一つの種子を蒔きますと種子の中にある生命が時と言ふ縁に觸れたら忽ち種子自身の本能を發揮するのが即ち因果則であります。

【問】 種子が生命に因て各自の本能を發揮し實現するのは解りました、若し種子が千年も昔の古い種子でも其の中に生命があるのでせうか。

【答】 生命は幾千年以前も今生れた赤子の生命も古い新しは無く生々して居るのです。只肉体の衰へるに従つて生命力が少なくなるのです。如何に出来たての種子でも地上に蒔かなければ芽は出しません、譬へば大きな石の下に朝顔の種子があつても時が来れば石の下をくぐり抜けても其の蔓を出し花が咲くのが即ち縁生と云ふので此の芽が出て花が咲くのは種子の中の生命と時とが一致するからであります。

【問】 其れでは犠牲の生物及び人間が母の胎内にある時に其の生命は流れて居るのですか。

【答】 左様です此に生命と言ふのは一切の種子の心の心靈を言ふのです、故に物體が電子の集合によつて出来る其の前より不滅でらねばならぬ。人間のタネは父と母との縁を辿りて此の世に出るのです、父母との縁によつて胎内に形を造れば、タネとタネとの感通力が双對關係を生じて来る故に母が懐

【問】 胎中の思想に因て生れた子が不具者となり又種々の病源を胚胎するのです。

【答】 世間には種々様々の人がありますが皆因果則のさばきに依て現はれるのでありますか。

【問】 左様です因果の法律を離れて人間斗りではありません一切の生物も天地間にあ

る有形無形の成立しません。

【答】 或る人が田舎から送られた大豆がありました、或る時小さな虫が其の箱の廻りに澤山附着して居りましたから箱を開けて見たら大豆の中から出た虫です因て日光に曝らしますと悉く飛び去りました、試に其の豆を煮て食べたらず下痢を催しました、之れは大豆の生命が抜けて仕舞て只、カス、ばかりであるから營養とならず、カスとなつて下利したのである事が悟れます。生命のない種子は死物で有る故に、豆の責任を果さず氣候と云ふ縁に誘惑せられて虫となつたので因果律を無視した事になるのです。

【問】大豆だの其他一切の生命ある物は悉く時と言ふ縁に誘導せられて果實に結び又生物の犠牲となる事は生命の制裁であるのですか。

【答】大豆の生命が虫となつて出て仕舞つたのは豆として其の本分の犠牲を果さなかつたのですから無用の長物となつた塵芥箱に捨てられたのでとりも直さず責任觀念を無視した人間と同様な人間の隨落者と言ふ結果を現はしたものであります、又此の豆を保存した人の氣分の現はれである事が解る豆その物は生物の爲に犠牲とならなければ累徳の功を積むことが出来ず犠牲とならざれば自己の向上が出来ないのであります。

【問】人間が時と云ふ事と因果律を無視すれば彼の大豆の様な無用の長物となるのですが人間をして因果を悟らしめ眞行の人に復活した時は彼の大豆を煮て食べた時の様に害を催さないでせうか。

【答】其れは釋尊が説かれた法華經の中に『三千大千世間を觀るに乃至芥子の如き許

かりも是れ菩薩にして身命を捨て給ふ處に非ざる事なし、之れ衆生の爲の故なり。』と仰せられたは此の菩薩と言ふ事は犠牲心を云ふのです自己の作つた因縁を悟つて犠牲をくゞり抜けて社會に成効するのが其の應用ではないでせうか大豆が塵芥箱に捨てられて塵芥と共に肥料となり、犠牲となつて再び生物の生命體のエネルギーとなるから茲で復活が意味される様に人間も犠牲をくゞる可く、憤の一字が大切であります、憤起と犠牲が人間の復活であります、芥子の如き小さな種でも地上に蒔けば花を咲き實を結び人々の爲に其の責任を果すではありまもんか、そして自己が未來に向上するのではありませんか轉因の眞價は茲處にあるのです。

【問】責任を果さざる大豆の如く人間も亦墮落すれば不用の人となるのですが若し人間として犠牲を果さなければ何んな制裁がありますか

【答】犠牲を果さぬ人は既に因果則に制裁されて居るので人間としての價値を失つて

居るから非常な苦心が非常な壓迫を加へなければ本光を放たないのである、縁無き衆生は渡し難しで松並木の肥料となつて墮落の手本となつて更に以上の犠牲を果さなければならぬのです

【問】

其れでは生命と因果の發露相となつて居る煩惱との解釋をして下さい

【答】

煩惱は即ち菩提で生死は即解脱である煩惱の無い解脱は虚虚であると言ふのは煩惱因果を無數に認めて其の煩惱の捕虜とならずに返つて煩惱を善用するから惡因を其まゝ善因に轉ずる事が出来るのである、而して八万四千の煩惱は因中の生命を無視したから起つたのである其の因中の生命を數で現しますと十に對する一ツであります、残りの九ツは一ツの生命を蔽ひ隠さんとする處の惡覺忘想であります。

一の生命は先天的で九の煩惱体は後天的な作用であります、此の絶對の一生命が迷ひの雲に隠れた時が凡夫の状態となり、人間の價値を失つて居るのですが

雲晴れて生命の尊さを認むる刹那に於ては、釋世尊が云はれた「價値三千大千世界」の黄金を以ても買ふ事の出来ない尊き事これに過ぎたるはなく生命の體現となるのです。

【問】

人は因の中の生命が一切の因果を制裁すると云ふ事は解りましたが、親の因果が子に報ふと云ふ理を示して下さい。

【答】

之れは因の元にある法報應の三つの理を明にすれば能く解ります、親が社會の爲に惡因を作れば必ず子孫に報ゆるのは知れた事であるが、子孫が親の惡因を認めて是を消滅すべく善行を爲すか、或は認めずに知らず識らずの中に善行をなせば其の子供の代には親て惡因は發現せないので、孫の代になるとそろ／＼發現して來るから人の家は三代目が六ヶ敷いと世間の人が言つて居るのです、法體たる親が子に報ふ可き生命の存續が子供の善行によつて報ゆる機會がなく爲に延長して孫に現はれ孫の代に報應の二理が現はれるのである。

此れ因の中に一貫して居る生命が嚴格な制裁であります。

例令は無形の「法身」より生じた山中の樹木即報身を切り倒して、薪炭即「應身」として此れを市に出せば人の爲めになつて物を煮たり身軀を温め生命體を活動する事になる、而して何物と雖も能く慈悲の働きにあらざるなく亦、法報應の原則を離るゝ事が出来ない、天地間何物を見ても物には、體（法身）あり相（報身）あり用（應身）ありて此の三身は宇宙間常住不變であります、因の中の生命が縁に由つて三理に延張し擴大する此間の消息を自覺せねば親の因果が子に報ふと云ふ意味が解りません。

【問】

因果の相續とは何んな事か解り易く説明して下さい。

【答】

曾て一國の宰相が一少年の爲に刺されたのも又平生百二十五歳の長壽を唱へて居た人が八十五歳で死んだり、大富豪が刺客の手に倒れ、疊の上で死ぬ事の出来なかつたのも其の他一切の出来事は悉く因果の相續で直覺的に申すと吾人が

死後までも遺るものは物理學的又生物學的の繼續のみでなく吾々が此の世に動搖を興へられ足跡は永久に消ゆる事なく其の一舉一動が因となり、果を生じ果より因を生じて斷絶する事が無いのである。彼の汽車に應用し燃焼した石炭は灰となるも其間に起された力は水をして湯となし、湯をして蒸氣たらしむ、蒸氣は空中に放散せられて雨となり、草木を濡す、水は化して湯となり、湯は化して蒸氣となり、蒸氣は消散し盡すも其の間に汽車は幾百哩を走りたるにあらざるや、汽盡き車止るも乗りたる人は既に遠きに達して居る、而かも其人々の乗車する因に依て土地所を異にして其の果を現はして居る吾々の言行も又此の如く微細に因果の關係を覺知すれば一言一行縦ひ形は變姿は異るとも斷じて絶ゆるものではない、之れを思へば肅然として自から襟を正さざるを得ないではありませんか。

【問】

因と云ふ事は大略解りましたが縁と云ふ事を解り易く示して下さい。

【答】縁が無ければ此の因果の問答も書かれぬ、又皆様と接する事も出来ない橋と云ふ縁が無ければ彼方の岸に行かれない縁を結ぶから世の中の眞實が示されるのである。嫁を貰ふにも縁談と云ふ橋渡しが無ければ向の岸に行かれない、縁を無視しては進む事が出来ない、縁には善縁と悪縁とがあるから、非常に大切である善き縁に合致するには善因があるからで悪縁に合致するのは悪しき因があるからである。

【問】

善因悪因に依て人々の禍福吉凶又幸不幸殊に美人醜人の別あるは一寸解りません又人の書いたる文字にも上手下手がありませが其れ何んな譯でせうか。

【答】

善因悪因も元を究むれば一如である禍福も幸も不幸も各人が心の置所一ツである、我慾があるから苦樂が生ずる、例せば金持は貧乏人が恩人である、貧乏人が無ければ金持は出来ません、智者は愚者が恩人勸業債券で一等の當つた幸福の人は外れた不幸の人が皆恩人である、外れる人が無ければ當る事が出来ない

又聖人の住所は淨土で、凡夫の世界は穢土と言つて別物の様にして居るが異なるので無く同じでも無いと云ふ様なものです、名筆の文字も無筆の文字も一字は皆一字であり、二の字は皆二の字でありますが天下に秀でて得がたい名筆と無筆とは同一の文字でも差別が無いとは言はれない、聖人と凡夫と同じ人間でも自然に異なる處がある、牡丹の花は人間の目には其の美しさを直感するが犬の目には分らないのである、美人を見て其の美しくさに迷ふ人もあり、又紅粉を施して美しい處が却て見醜く不快を感じる人もあります。

【問】

聖人の住む處は因果を感じ無から即ち極樂でありますか。

【答】

聖人は小我の目を離れ善惡因果を超越して居る故に一生涯煩悶苦惱の因も縁もないのです、世の中を極樂と見て人を救ふから此の世そのまゝ處も其のまゝ極樂であり尊き住所と確信するのである、「法華經に衆生の遊樂する所なり」と云はれて居るのは聖者の見た世の中を言ふのです。

【問】 其れでは聖人の住む處も凡夫の住む處も因果則はあつても別に隔たりがあるのでは無いのですか

【答】 別に隔たりはありません、例令ば同じ土地でも、王が住めば都となり商人が住ば市となり、農夫が住めば田畑となります、一ツ世界なれども畜生の爲めには畜生の世界であります、と同様に大將は士卒の集る處に止り、聖人の教へは凡夫に依て用を物し燈台は闇の爲めに存在を認められ、土瓶は茶碗に依て其の用を認められ君は臣に依て尊く、親は子に依て現れ智者の功は愚者に依て用があり悟りは迷に依て現れ清浄なる蓮花は汚き泥に依て花開き、蓮花の清きは泥の徳に依て現はれ、泥の徳は蓮花に依て現れるのであります、左れば、佛教に所謂邪正一如、善惡不二の眞理が悟れると同時に聖人も凡人も一如と悟る事が出来るのであります。

【問】 世の中で善人が衰へ悪人が盛んなる所謂善因果惡果善果の理を御示し下さい

【答】 世の中は全く惡榮へ善衰へて居るかの様に思はれる此れは我が國ばかりではなく支那の大聖孔子の如きも陳葵の厄難に遇ひ七日間も絶食し悲惨の状態もあり顔回の如きも不幸短命にして歿したのである。去りながら因果の大法は三世に互つて活躍して居る故に單に現世の成行きのみを見て之れを測定する事は出来ない。

道元禪師の言はるゝ如く善惡の報に三時ある。一ツは順現報受、二ツは順次生受、三ツは順後次受この三世に亘つて必ず現はれ来るのである故に現在の結果は過去世に於て斯く成るべき因種が有つたに相違ないと言ふ事を明かに信ずることが出来るのであります。

【問】 神道は人間は神の子と言ひ佛教は即身成佛と云ふが死んで佛になる事ですか又は生きて居る中に佛になるのですか示して下さい。

【答】

人は天地の神と同根なりとある如く根が同じとは親が一つと云ふ意味で吾々の古き先祖は無形の神から此有形界に産み出されたので有ます、亦即身成佛とは人間が立派な人格者に成つた時の事で因果の網に掛らないだけの修養が出来た位置を成物と云ひ即ち物に成つたと云ふのである例令ば寝て居て頤で人を使ふ様に成つた時を成佛と云ふのです。

【問】

吾々凡夫が即身成佛など云ふ道理を體得する事が出来ませうか、未來に成佛する希望さへあればよいのではありませんか。

【答】

元來智者や學者がするのではありません利根も鈍根も共に直感する刹那境でありますから學問智識の必要はありません唯信ずると信ぜざるとにありませう。教育のあるものか罪惡を作り無學のものが社會的大事業を爲す事は互に認めて信する處である自分の本體生命を認めるのが即身成佛の中心点であります、本體生命を認めるのは自我を滅する事を自覺せねばならない沒我の境に美はしき

人生美しき國民道德があるのです而して利根鈍根を超越した眞の博愛の精神は徹底し、仁慈の美は窮極に近いのである。釋尊が慈悲を説き、キリストが愛を宣傳し、孔子が仁を教示せられたのも亦實に人心秘奥の要求より發露されたものである。

【問】

生命本體が活躍して居る状態を明かに御示し下さい。

【答】

生命本體は一切の生命の生命體となつて居るのです「佛敎に衆生皆佛心あり佛心とは大慈悲心之れなり」此の大慈大悲の行ひが生命本體の活動であります此の生命を保護する相當を示しますと、例令は池の邊りの茶屋に居つて手を拍てば魚は集つて來る又鳥は驚いて逃げ去り、そして茶店の女はお茶を汲んで來る様に同じ生命がある者でも色々に現れは此の差別の相が生命の發露實相である悉く因果則その儘が活動して居るです若し因果則を無視して手を打つた響きに應じ無いものは總て制裁を受けるのであります。

【問】 生命の活動状態は解りましたが人間が學文理解がありましたしても生命體に直感せぬものは何うしたらよいでせうか。

【答】 其れは過去の因襲と申して其の人々の心に泌み透つて居る迷ひを一時放棄して御覽なさい只ちに生命本體に直感が出來ます別に工夫も何も必要はありません先づ生命本體に直感するのが因果を推斷するに一番早い道順と思ひます。

【問】 其の本體に直感する刹那の發生について解り易くお示し下さい。

【答】 因あれば必然縁は要求する問題で縁が縁付けば子孫の因を宿すのは知れた事であるが天地和合して萬物の生ずるのも春夏秋冬の縁に觸れるからであります又生に四ツあります、卵生、濕生、胎生、化生です卵生は鳥などで濕生は入梅期を過ぎて發生する蠅及虫類で胎生は人間が母胎より出生し化生は光明皇宮が施湯の際癩病人に對する御修業の時身体より光明を發する刹那に發生した生命本體の二重に分裂した活動の如きであります。

以上悉く縁と云ふ一ツの橋があつて發生するのであるが此の橋の善惡と因種の善で惡を選ばないと惡縁となつて苦心するのであります。

第一注意

甲靈祭所より 乙靈祭所の方が行き良ひとか 何々教師よりあの教師の方が良ひとか 尙あそこに行くとか あの人の教に習ひ度ひとか其人 其時其都度の想ひ様考へ様に依りて かへる事に結構です 此れが心靈界の信仰です

第二注意

療術料金が無ひからとか 納むる金に困る(出さ無ひ)とかで御詣り成さぬ方が相當

有ると承ります。此れは又飛でも無る其人の考へちがへです。其ふ言ふ人は何事をさし置てもすぐ御出下さい。其な事を言ふたり言はれたりする方が有りとするれば其れは心霊界の教では有りませぬ。

第三注意

教師に成り度ひが日が浅ひとか、學文が無むとか、年がどうのと遠慮して居らるゝ方も大分有るかの様に聞いて居りまするが、何事に依らず一應御相談に御出下さいませし出き得る様に出きて居りますから、明日と云はず、今すぐ御出下さいませし御待ちして居ります。

進歩發達の秘決

心霊界教會は何ぜ一定の規則と云ふ物が無むか、理由一定とは、一ツに定むると云事にして進む可き道は二筋しきや無むので八達する道が無むので有る。規則と云ふ事

は「オキテ」「サダメ」と云ふ事にして活動を猖害する者にして、寧ろ死物に儕き者なり「掟」試に見よ一ツの規則を三人は三色に解釋して居るでは無むか。

規則に囚はれて、自己自身の自由を束縛くされ進路を妨たげられてしまふので有る、例えば一會社として規則を其日其時に換る事の出來きぬ重役社長では、決して其會社の發展を望み見る事は出き無むので有る、朝に夕に規則細則のかへる勇氣の有る社長、長の經營せる會社は必ず發達する此れに引換へて此のかはる規則に不平を言ひ陰口を言ふ社員は必ず落伍する誠に成る、我が心霊界の教へは十人百色に百人は、寧ろ千色に説き聞かせ活動なさしむるが爲に規則を定むる必要が無むので有る。

人多くは規則の後を生きせき切りて追ひ馳けて行く心霊界の教へ又教師信者の後を社會の文化や規則が後を追ひ掛けて來る、我等心霊界同人は文化の尤も明き公道を裕々と活歩する先馳者である。

今一ツ言ふて見るなれば心霊界は其人其都度聞かんとする人の人物の大小、腦隨の大

小、入れ者の 大小、其日天氣都合、風の吹きまわし、お早ふに有らず、今日とも付
かす 又今晩らしくも有り、無さそうでも有る、此の柵の内は入るべからずにも
有らざるが如しと云ふが如かるべし。

要するに 嬉れしむ人のみ嬉しく有り、悲しき人は悲しき人心なり。
南無有りがたき心霊界同人なり心霊界同人以外の人には其の有りがたき味はるは分か
るべからざる者なり。又心霊界同人としても其人其人に依りて有りがたき大小の差は
をのずと 差の有るべき者なり、依りて一定の規則を以て計り知を事興はざるなり。
神様佛様の御威力は無限成り、廣大なり、元より限り全く無し。
故に來り求めよ、さらば與へん天下の信者に。

信 仰

玄關を叩く者が有りますので 起き出て用件を聞くと私しわ 誠に不幸の者で病人は

絶へず 事業は益々頓挫するし困まつて居ります神様の御力で幸運の人に於て頂きと
う御座ぬます。 石井「えらく君は早く來られたね

客 「先生の寝込みに御伺ひして其れから田舎に行つて來たいと思ひまして御迷惑を
知りながら御伺ひ致しました。

石井「信仰と云ふ事はどんな事る言ふと思ひますか。

客 「神様を拜む事です。

石井「神様を拜む事を心霊界では信仰とは申しませぬ。信仰と言ふ事は人と人とが相
信じ合ひ相承認し合ふ事を信仰と言ひ、信行と申します、人に迷惑をかけても
自己さるよければ其でよいと云ふ事は信仰でも何でも無る 不運不幸の人は神
様より其人其方に對して悟る様、分る様にと御示し被下るのですと、この惡る
い病人は何んの爲めに苦るしむか 幸福で無い人は何の爲めに 苦るしむ世の
中を苦世苦世暮さなければ成らぬかと よくよく、考へねば成らぬのが信仰の

極智で有ります。

君の様に自己分さる都合よければ其れでよゝ人の寝込みで有らうが何んで有う
がかまつた事は無ゝと云ふ人を昔から我利我利者と云ふでは有りませぬか
君はそうするとお化の一種ですよ 不足勝の人 不平の持ち主の人 其れで有
るから病人に成り氣苦勞が堪へ無ゝのです。

客

「始めて世の中の人生と云ふ者が分りました」と立派な洋服紳士が両眼に涙をう
かべ 玄關の土間に膝突き両手を付きて呼鳴此れで重荷を卸した心ろ持に成り
ました 有り難とう御座りましたと悟と嬉びの内に弟の事を依頼し歸路につい
た 別に説て有りまするが佛教で言ふ廻向と言ふ事は思ひやりと云ふ事です
人の思ひやりの無ゝ人が神様を拜み奉り 御佛を念じたからとて何の御利益が
あらう筈は御座りませぬ 人様に良き様善き様にと心かけて心から親切になさ
るのが此れ以上なる信仰仰は御座りませぬ 心すべき事成らすや

天業と人力とを知れ

人は天命と云ふ事を知らなければならぬ、人事を盡して天命を俟つと言ふ事は意味深
い事である。總て何事にも人力の範圍とがあり、人間業の領分とがある、故に人間は
人事の領分を守り、其の領分内に於て人事を盡せばよいのである。人間の領分即ち人
の爲し得る所を知る者は能く其の範圍を守つて其れ以上は人力の及ばざる天命、神業
に任せて置くのである、之れ所謂人事を盡して天命を俟つのである。

然るに人は多く先見の明のない身を以て此 無常の世に處し我見を以て、あてにも成
らぬ何事かを計畫する此れ等の人たちは自己の領分を逸して神業に立ち入り、人力の
範圍を忘れて天命を左右せんとする横着な考へである。

生死命あり富貴天にあり、即ち生死は天の命ずる處で人力を以て及ばる處である。
富貴榮達は神業の範圍である、故に神に任せて置かねばならない。

と云つて養生を怠るのではない惰けて日を送れと云ふのでも無い養生に努め勤儉に身
 を持て時を空しく費さぬ事が人力の範囲である只だ其結果が何う成り行くかは天命で
 あり神業である養生が時には無駄になる事もあるう、勤儉が又徒勞に歸する事もある
 う、其れは神業で如何んとも仕方無い事ではないか、之れを自覺して我のはからひ
 を捨て一切物事をあてにせず自己に與へられた事に精進するのが賢明にして處世の最
 良方便である、あてにしなければあての外れる事もない失望も落膽もないのである、
 然るに人に自己の立場を忘れて何故か無理なる種々のはからひをする其の原因は我の
 一念にある我のある所から微々たる人間の力を忘れて神業の範囲に立入り自然のまゝ
 に成り行く事を其の自然に任せ得ないで我が意の如くに成り行かせ様とする。
 其れが即ち強慾である。人道に背き神意に逆ひて萬事意の如くならず煩悶苦惱となる
 人間の一念この我慾の爲に開くなり、我が身で自分の心が分らない、あてに成らぬ憐
 れなものは人の身で肉體は禍ひの袋である。此の危介極まる皮袋を背負ひ廻る身の世

渡りは綱渡りの危険さである、死者が哀れか、生者が不幸かとも言ひ度なる安心して
 世渡りの出来ない不平不満煩悶ある人等は先づ來つて心靈界に開け、而して樂しき人
 生を送られよと叫ぶ。

身(二)毒と七難

人間は神の子である分靈であるから宇宙と同じく神の如く智と情と意とを有つて居る
 けれども神の如く絶對の物でなく誠に不完全の物である。
 神は大なる愛慾にましますが人間は之れに反して我慾である。三千世界の運用は万物
 の悉く宇宙全体が神理に依りて活動するので有る。人間は小さな考へから自分の微力
 を知らず人を推し除けても我が身の慾望を充さんとして強慾の心を起す、之れを痴と
 云ふのである。處が人間萬事意の如くならず爲めに不平不満となり、遂に人を怨み世
 を怨み怒り腹立ちとなる之れを、瞋と云つた之れは必竟するに智と情とに乏しく意志

弱く調和の出来ない無氣力の愚かなもの之れを痴と云つたのである。此の貧瞋痴が人の心の三毒となつて人間生活上種々なる因を作り其の果として外部より、火、水、風主、繫縛、悪鬼、怨賊の七難を我が身に招く事になる之れは悉く自己が求めた罪咎である。

去りながら此の罪となる身(三) 毒は一面に智情意の不調和より變化し来たもので人間には又附物である。物を愛し欲しいと思ふ心が人間の本能で、どうする事も出来ないのである。然るに自分は慾がないと言ふ事が虚偽であるなれど多くは心に鍍金して神を詐り他人を偽り 即ち自己を詭自己を詭 人心の缺点である。

此の慾を出すのが即ち人の情 けれども其れは道理に背く悪るい事だと判別するのが人の 智。そして善いと思つたら直ちに實行し悪るいと知つたら断じて行なはないと言ふのが其の人の 意である。此の三ツが調和されて圓滿にして下さるのが御守護神様の御加護で有ります。

信仰心の無い人は之れが調和出来ない不完全なのが多くは其れであります。

人間の 智が足りないで自分のする事が善いと思ふから怒り腹立ち 瞋と化し人の情が欲しい其の程度を越すから 貧と化し、意志弱く善悪の決断なく去就を誤るのが 痴と化するのである。今心靈界の信仰に歸依して各自心の迷雲を拂ひ 神智明らか
に開け行くに隨て 清水益々清く遂には神意と感應し冥合して驚天動地の大威神力を
發起するに到るのであります。

例令ば人間の情慾は限り無く恰も泥池の如くである其の不淨の泥池から清淨無垢なる
蓮花の開くが如く此の清淨の蓮花に因て不淨の泥池の陰徳が現はれ又た不淨の泥池に
因て清淨な蓮花の陽徳を現はすが如くであります。

左れば此の身(三毒)の心を持つ吾等不完全の人格が以上の如く完全なる神格と化し
た時、身に對する七難の滅するは論を待たざる事でありませす、日蓮宗の鍋かぶり上人
が眞紅に焼けた鍋を頭にかぶりたる如く、近くは大正十二年の震災の如く、隅田川附

近は全く火水風の大難で悉く死滅であつたが斯くの場合に不思議にも救はれたものもある。

日蓮上人が龍の口の法難も王難であり繫縛の難である。

親鸞上人に對する辨圓は、怨賊難であつた、又吉田松蔭の如きは王難とも言はるゝが惡鬼難によつて首は斬られたが松蔭の精神は切られなかつた、故に今日に至る尙其魂か社會萬衆の心に存在して無限に人心の感化を與へて居るのである之等の實例は少くない。

凡そ宇宙間何物と雖も吾れと關係を離れた物はなく亦人には絶對の惡人なく絶對の善人もない、之れを善用すれば毒藥も變じて良藥となり、我れの敵が即ち味方である。要は宇宙の眞理を體得して神人合一の妙境に到達する事を目的とせねばならぬ、此れが心靈界の教である。

極樂と地獄

極樂は西方十萬億土の遠い處にあるのではない、地獄と共に一ツの心に繼がる裏表である。言はゞ各自の身の上进心の内の事であるが其の心が中々六ヶ敷い、捉らへやうとしても形が無く見ようとしても相が無い、色も無く、香りも無く、聲も無い、恰かも虚空と同じ様の心であるが其の發動する所は火にも焼けず、水にも溺れずどころではない、火を水とし、水を火とする其ればかりでなく自分で自分を假死させる實に恐ろしい働きをする、然らば地獄も極樂も苦も樂も心一である事が何の不思議も無いであらう。心一ツで苦を樂にし樂を苦にする位は何んでも無い地獄を出さうと極樂を出さうと其れこそ朝飯前の事である。

兎角世の中の人に泣き言が絶へない、不平不満不足不快で日又た日を送る者ばかり、怒たり怒られたり怨んだり怨まれたり、嫉んだり嫉まれたり、羨やんだり羨やまれた

り、そして互に心を苦しめる之れが地獄である、人生の目的が何處に在るかは暫く置き只世界萬人我れも人もが日々齟齬として居るのは何の爲か、多くは自分の幸福を増進したいが爲めである。先づ人生の目的は自他の幸福にあらねばならぬのである。所が之れを事實に徴して世界の人誰あつて幸福を得て居るであろうか幸福を求めると稱しながら其の實不幸を求めて居るのがこれ人間の實狀ではないか、生きて居る悲しさに其れと知ても矢張り幸福を求めずに居られないのは煩悶と言ふか業報と言ふか何共氣の毒の次第で人間は、所詮不幸の捕虜である。さては世界に泣き言が絶へないのである。然し翻て思ふに其れは幸福の求め方が悪いのである、世間の人は幸福を物質にのみ求めるが其の實幸福は心に在つて物には無い結構な此の世界を苦の娑婆だの、穢土だの火宅だのと八ッ當と的に罵りたくなるのは幸福の所在を見損なつて心に在る事を知らず之を物に求める罪である。

而して幸福を心に求めるとは心の持ち方を變へる事で苦樂は一心で、心一ツで苦も樂

になり、樂も苦になるのである。極樂は茲を距る事遠からず足元に有り、君と僕との中間にあり。極樂は西にもあらず、東にも北みちさがせ南(皆身)にあり。僅かに障子一重の隔りで地獄もあれば極樂もある、浦島太郎が人に羨やまれる程の果報者が、玉手箱を開けたので忽ちに變じて其の身は見るかげも無い不幸の姿と化したのである之れはお伽話に過ぎないが要するに迷悟の問題である。心靈界の信仰は何事も活殺自在で觀世音の妙智力を體現し恐ろしい心の三毒もこれを善用して身に對する七難を滅して直ちに七福に化生すると云ふ極意を修得する教である、故に商賈繁昌し一家は榮へ身は健康となり、心は彌々快活で一家圓滿に揃つて善く働くから世間の信用も厚くなり、何時もニコニコして極樂の日暮をして居る、何んな人でも一度此の極意を體得すれば苦が樂となり、不幸が轉じて幸福となり、何事も心のまゝである。幸福を望まると人は先づ來つて心靈界の教を聞け、そして其の奥義を究め共に吾身吾心に極樂世界を建設せよ大きな高天原(腹)に安ぜよ。

嚴禁之事

口を切ると云ふて

神様が乗り移るとか佛様の御告げなぞと不思議な聲を出したり手振り、身振りをして如何にも誠しやかに事實有り相な事を言ひふらす行者が有りまするが我が心靈界教會には絶對に有りませぬ萬一有りと致しますれば其れは其人の今迄成し來たつた行いと空想、即ち慾望我慾、我儘を懺訴して居るのです。何にも知らぬ第三者から見ますると如何にも神掛りの様に見えまするが決して其んな者では有りませぬ、やつて居りまする人の今迄なし來た事を恰も御伺ひとか何とか迷つて來た人の様に言ふのです其れで有りまするから口を切る人に限り變てこな心理状態で有り生活苦であるとか家庭不和の人で有る事を具に嗚呼そるかナアなる程ナアト合點が行きましやう、御承諒が下さましやう變な行者の處に行きますとあの人の靈を呼んで心を試して見ましやう、

なぞと言て愚にも付かぬ事を言つて寄つてたかつて類は友を呼んで他人の迷惑を省みざる不都合にも甚だしき者なり、我が心靈界教信者は六根清淨の御祝詞を奏上奉る以上は六根清淨に成る可く拜み奉るべきで有ります。かゝるあやしげなる汚れたる人には振り向もせぬこそ尤も賢明の事で有ります。君子危に近か寄すと云ふ古き教を學びましやう。

神様の御告とか又は御神託なぞと云わぬ事

神様が其な御世話をおやかに成るか又ありふれた人間共に御神託なざる筈が有りますか、其れを魔に受ける魔拔さを考へて見る時笑ふ事も怒り付ける事も出さぬ倘ばかりであります。偶々豫言じみた事を言ふ事は社會人類に及す害は甚大で有ります絶對に注意すべき事で有ります。

信者を迷はす様な事を言はぬ事

自分で解決の出すぬ事をむやみに言ては成りませぬ、家相人相を始め方位方角等色々

之より占ふ事がありまするが多くは知たが振りをしてよけいなをせつかいを焼く人が有りまするが恭むべき事有ります。

親切ごかしの言を、不親切極まる行爲を成す行者も世に少なく無い行者とは行ふ者で有りますから實行して始めて値價を現す指導者で無くてはなりませむ。

自己主義な行爲言動をつゝしむ事

苟も信仰を持つて世に立つ心靈界教會信者は殊に教師たる者は自己の利益の爲め加持祈禱と稱し又は他人の心を惱し、心配を掛けたり金銭物品を強要したり家業の妨に成らぬ様注意を被い安心立命の實現の導きこそ信仰信念の道ぞかし。

禮拜祈禱に時間を費やさぬ事

世の中には信仰の爲め家業を怠り人道を破壊する信仰もかなり多いので有ります。阿吽の一時時こそ、祈りの真心で有ります。

氣付

心が救はれ救ふ心で有ります築き上げてこそ嬉びと安心の(境涯)
(今日外) 今日より外に何物がありませしやうや、今日一日の嬉びの吾

今日一日安心出さる吾。

今日一日結構の吾こそ幸ひの吾で有ります。アア今日一日不平不安無く感謝致しませしやう。

世の中は心一ツのをきどころうれしくもありかなしくもあり。

世(夜)(豫)の中

人は名譽を重ながら不名譽の行爲を敢て成して居ります。其れは表面を飾る名譽で内心は不名譽極まる悪るい事を知らず知らずで無く、知りながら、行て居るので有ります。

凡そ人間は外見さを良ければ、其で良いと存じて居るから有ります。

良心

は善悪と云ふ事は長く存じて居るが、倍其良心の命ぜる儘では不安と想ふ不明の考へが眼前の利慾に絆されるので有ります。

自己の心配苦勞を飾り無く打ち開けて話(放)して御覽んなさい相談して見給へ、三人寄れば文珠の智慧と云ふて(文珠菩薩)様が何か良いお教をお授け下さいませ。氣魔利が悪ると云ふ。意苦地の無い小さな心から、一人苦世々々思案して氣を病ひ病氣をして居るのだたとへば教師の方に私しは、こんな氣分で有りますので云ふ心配が有るので、其の理由はネエ、こふなんですよと打開けて御覽んなさい教師の方が聞くまいと想はれても戸をどしどしと打つ如くいやでもを、でも戸を開ける様に、心を打ち開けて熱心に人情味有る御力添へ下さいませ事を神様と貴下に誓ひます心霊界教師は何人でも御伺ひ申上げまして御病氣もお心も「直して」差上げますから貴下も「治つて」下さいませ様御願ひ申しますと云ふ様に成るのが世上はいざ知らず、心霊界教の道知るべで有ります。

運は天に有りと云ふて寝て居りましては運が来る筈が無いです。運は天に在りとは、「天」とは「神様」の御事で神様が運を運と御持ちに成りまして一人々々にしかも公平に御分け下さるので有ります其で有りますから運は天に有りと昔から云ふので有ります寝て待てとは「ヅウヅシ」無腦者の若伍者の負けをしみの「言ひ草で」運は(練)て(増)せと云ふ謂ゆる(努力)せよで無く努力すると云ふ自己自身の努力心奮氣の發露で有ります故に以て神様は限り無き(御徳)(運)はあゝもこふもと(練)つて(練)て(練)り拔た(精練潔白)の方に運を運と御與へ下さる尊い御教へで有るので有ります。我が心霊界の教師の方に色取り／＼で種々様々です名譽々々と云ふて一かどの主人面をする人も奥様然として人を詐欺をして／＼と(名落底)(奈落底)に落ち込みます。此れに引き換へて大澤靈元先生の如く○山が言ふ通り廣告を一人々々に丁寧に御手渡しして人を救ふた爲め、今は自分自身が奈落の底より「ドンコソ」生活より今の生活状態を見やる時何人でも幾く同音に之より意儀の有るべき道理、極

樂淨土の大澤靈元先生成らずや
 其れ此を讀じ人聞く者何人でも名譽を重んずると感ずる人は直に實行の人として
 人間名譽を捨てよ神は眞の神の名譽を授け賜ふ者に「運」を「ウント」貴下に授け賜
 ふなり人借は恐るゝにたらず天借は（ヲソロシキ）事を悟れ。

思想念意

荏原區二十八區會館の二階に煙草のフキガラ云々の注意書が有りますのを拜見致しま
 すれば、此の注意書の主人公はさせるで煙草を吸つて居らるゝ人で有ります。
 もし吸ひ殻と書て有るとすれば巻煙草を吸ふ人で有る事が判断が出来ます。病氣を聞
 きますれば其人の行爲並に平素の意識（精神作用）が想像されます、想像とは思ひ計
 る。心理學上既知の觀念を材料として未知の新觀念を作るので謂る六根清淨の祓の五
 臟の神君に説て有る如く想ひ思ふて意志（料見、かんがへ）て相互間の思議（思ひは

かる）事が念力（一心に思ひ込み）（思ひ考へますれば）念願（望み。一心の思ひ）に
 よりまして、神意に當達する事が出来るのであります。一居一動何事でも吾等人間に
 は天上天下宇宙萬物一濟有ると有らゆる靈魂と共通の力を持つて居るので有ります。
 故に願ふ所成就せざる無し、此れ即ち靈寶（靈力の寶）神道、神靈に近か寄る一本道
 で有る。

信ずる人の特權で有る幸福なる事と信ずる吾の幸福さよ。と感謝して此項を止む。

境遇に感謝せよ

凡そ世の中に何から何まで自分の意のままになるといふものはない、現にしてゐたこ
 とは外れ勝ちであり、出来ると思ふてゐたことは出来ぬのであり、その度毎に煩悶し
 懊惱して我身の處置に困り抜いてしまふ様なことが多いのである。考へてみれば自分
 のこの身でさへ思ふ様に成らないではないか。まして兄弟姉妹一家のことが思ふ様に

ならぬとて今更愚痴を並べるにも當らぬことである。時には身體の具合が良く調はず病氣を起した時、順境にある者が忽ち逆境に陥る場合、樂しみを得んとして苦しみを得、長壽を慾して短命に終る。其の時人は今更の様に狼狽へて俄かに神佛に祈願し信仰を求め安心を得ようとするが、平生は安心とか立命とか乃至神とか佛とかいふことは他人のこの様に思ふてゐて、一朝不幸に見舞はれて初めて神佛に氣が付くといふこれが總て人の缺點であるけれど、これ等などは平生に於て眞の我が力となるものは何であるかと深く考へて見ないからである。學問の力か、財産の力か、是非曲直の理窟かこれも成程或る程度までは解決出來やう。なれど果して人生究極の大安心となるであらうか、有爲轉變の財寶、地位、名譽が何程の力があらうや、又、善惡……利害得失、苦樂などの、我慾を中心としたる希望にのみ、生き様とする者は、長くも短くも人生五十年「いろは」の「淺き夢見し醉をせずん」の時に、失望落膽の時期が數々あるに相違ないのである。

故にこれ等の苦より、得脱して、一日も早く、絶對無限、如何なる者と雖も相抗することの出來ない最高の、權威と力のあることを知らねばならぬのである。これが信仰の力と云ふのである。我心靈界に於ては、この様な論據一切を捨てさり迸る血潮、生々しい肉林のまゝ、仰ぐも尊き、天照大神様の御心に縋り、御守護神様と感應して、見苦しき世をば、直ちに高天原の極樂と化し、自分といふ者をしつかりと相極めることが出來まして、眞の大安心が得られ、感謝の心が即ちこれでありませう。人は自らの境遇に満足し感謝してゐたなら、如何なる困難事が降りかゝらうとも、感謝に接し之を迎へさへすれば、愉快に心一つで其の日々も容易に送り得られるものであります事を皆様に申し上げます。

思ふ様に成らぬ世の中に思ふ以上になる心靈界
 誰人も御遠慮なく御自由に御出かけ下さいまして吾身のため、又は世のために御困りの方々を導き、大神様、御佛様に多こうに感謝し祈りませう。

廻向

佛教で廻向をすると云ふ事の御説教をなさいませ。又義太夫で廻向しやうとて御姿を繪にはかゝせはせぬものを、と云ふ事も聞いてゐます。廻向とはひこら（向）まはる（廻）ると書きます。と云ふ事は先方の身に成つてよく／＼思ひ考へて見なさい。妻は夫の身に成りて考へて見る、夫は妻子の身に成つてあゝもこらもと考へて見る。己れをつめつて他人の痛さを知れ、處か多くの人々はのどもとすぐればあつさを忘れると云ふことわざの様な事が多いのであります。私し初め皆様も生きて居る以上は（科無くて死す）といろは四十八文字にしるされて有るごとく死なねば成りませぬ、生身の持主死ねば神に祀られるか佛になりまするが其の家々の（神）棺（靈）によりて各々ほらひられまするが、現在生きて居る内にほらひられまする死と云ふ仕度をして置き度いものです。それが佛教で云ふ廻向（向に廻る）と云ふ事なのです。信長は本能寺で

家來の明智光秀に殺されました。尤も其のはずでしやう信長公は神社佛閣を破ぎやくなせしも大功記十段目で明智光秀が大聲で演説をし發表してゐるでは有りませぬか。加藤清正公は日本はあるか朝鮮までも南無妙法蓮華經の御旗を押し立／＼ひるがへし武名を轟せたではありませぬか。御承知の通り如何なる法華寺に靈拜致しましても清正公様の御像御位拜の無い御寺が有りませうか、清正公様は廻向を生きて居られましした時より御佛の御靈拜をされた方でありませう。人は一代名は末代です靈魂は不滅です私しは今より自己の爲め廻向致しませう。あまねく、一切に及ぼすと教へてあります他人の爲め吾が身の爲め世界人類一切の爲めあまねく一切に及ぼす。冀は大神様に又御佛様よと御慈悲に寄り縋ります、聞しめ給へと祈り申壽。

信仰之一步

御參詣に出かけると云ふ心持ちが信仰（眞行）の玄關

心霊に常に鍵をかけ強く正しく生きませう。
 一寸の暇にも神佛によりすがりませう、心のそこに戸締を嚴重にして魔物におそはれぬ様に氣を付けませう。
 信仰に心霊に不安の生ぜし時はすぐに私の處まで御出かけ下さいまして力強き安心の道に進みませう。
 そうして此の好期に一家擧つて御參詣を致しませう、そうして、安心致しませう。

安心の秘決

私がこんなに安心の出来る様になりました秘決を公開致します。凡そ人間として心配苦勞のない人がありませうか、誰方とした處で皆心配苦勞がありますよ、私の心配苦勞といふのは其れはく大變なものでした。其れから其れ此れから此れと日を追つて

新しい心配が殖へて来て苦勞と共に古ひ心配と新しい心配が交線する様な場合が毎日々々殖へて来て此の心配苦勞より安心の道を見出し開拓致しました。今日は心配苦勞は一ツもなく安心と喜びの中に人間らしい朝を迎へ夕日を送る事を得ました事を感謝せずには居られませんでした。此の嬉を一人で獨占するのも勿體ないと存じ公開致し皆様に御傳へいたします。毎日毎晩大勢の方々が御越しになります初め御訪ねの時は不安、心配、病氣と云ふ風に御氣の毎で御同情せずには居られませぬが二度が三度、三度が四度と重ねてそれに連れ安心と喜び健康と元氣に漲其の御勇氣を見るにつけ私しの楽しみは譬へ様か有りませぬ。安心を得た私しが皆様に御安心の出来る様道案内を御相手致す事のみを喜んで感謝して居ります。

世想

切り迫つた世想、行き詰りの人間界何處へ行く、あてども無し、踏み、にじられて、

生き、たへだへ、文化教化と丸で化け物、屋敷の看板の様に、化けの字が大眾を呼びかけ變化妖怪にいつか化かされ、壓倒され人間の廢品は、晝夜を別かたづひよろつき歩きぶつそう極まり無き文化の世の中、良心は餓死せんとする靈魂は吹き飛ばさる。悲境に落ち入り門違ひだらけの、人と心に死物狂ひの、生活戰略奪戦に親も子も恩人にも差別なき死苦八苦の状態、悲惨、嗚呼悲惨、いざめいざめよ、靈魂よ、安樂世界はこゝにあり、運命開發を祈願し御守護を貴下の守護神様に依り速に解決せよ、徹底的に神にすがれ、今すぐ靈光靈力の威力にすがれ。

艱難に向つて進め

昔から艱難は汝を玉にすと云ふ諺がある。全く艱難に遇つたもの程何んとなく力があがり底光りがする艱難に遭遇して居らぬ人、苦勞をせぬ人間は小さな事變に出遇ふても

忽ち意氣銷沈し煩悶苦惱に陥入つて仕舞ふ。然るに艱難に鍛へられた人は人世の荒波に出遇つても之れを打開して進む抵抗力がある。又人に對する同情愛がある。更に其の人の人格は艶消しされて底光りがするのである斯かる人こそ實に人世に無くてならない必要の人である。

世の青年、淑女殊に信仰を持つものは艱難を厭ふてはならぬ。寧ろ艱難に向つて勇猛精進すべきである。時代は再び來らず須らく艱難と闘つて人格を磨き一歩々々向上すべきである。

維新の勤王志士梅田某氏が「憂き事の尙この上につもれかし限りある身の力ためさん」との歌を座右の銘にして居ると云ふ事である。斯くの如き健氣な心懸けが望ましい。日本の近海玄海灘に産する鯛は肉が引しまつて一番美味しいと云ふことである。其れに引かへ温かな内海で育つた鯛は身が軟かで味も落ちると云ふ話である。之れ等の魚類でも波靜かな内海に住んだものよりは世界有數な玄海の狂瀾怒濤に鍛へられたもの

が料理の上にてまで稱讃されるではないか。

我が國で毎年正月の門飾りを松竹梅を以てするのである。之れ等は何れも艱難の徳を現はし且つ教を示して居る。

松は常磐木の中で最上のもので春夏秋冬其の色を變へる事が無い實に『松に古今の色なし』である我等人間の守るべくして行へ難きは節操である。婦人の最も重んずべくして而かも行ひ難きは貞操である。殊に現代の新らしい婦人に於て然りである。

金の爲め名聞の爲めには節操を捨て、省みない人の多い人生に正月の門に青々と飾られた松は何んとゆかしい姿ではないか。

竹に『上下の節あり』で之れ又大きな教訓を與へて居る。現代最も亂れたるは禮儀の觀念である。土を上として尊び、下を下として慈しむことを爲さない、家庭の上にも諸種團體の上にも常に風波が絶へない。之れ等は西洋輸入の平面的平等思想の觀念より生ずるものである。

聖徳太子の憲法第十七ヶ條の其の一に曰く『和を以て尊と爲し怖ことなきを宗となす人皆黨あり亦達者少なし是を以て或は君父に順はず乍ら隣是に違ふ』と宣せられた大は一國の政事から、小は一家庭に到る迄上下其の席を尊び禮を重んじ互に相和すべきである。實に竹は上下に節あり、人々の禮節を示して飾られたのであることを考へねばならぬ。

梅は『寒苦を経て清香を發す』と云はれて寒風凜烈の中に蕾を持ち花を開き實を結ぶのである。其の寒氣を抱して開く丈け他の花に比して香りも清くゆかしいのである。其の艱難に練へられし人程が底光りのあることを象徴して居る。只だ花が香かしい斗りでなく其の實も又人に稱揚されて居るのである。

古今を通じ國の東西を問はず偉大なる人格者は多くは逆境に苦しんで來た人である。釋尊は王宮を捨て有らゆる身の果敢を抛得て山に籠つて苦行をなし、キリストは名も無き大工の子と生れて艱難と苦闘して來たのである。法然上人もまた親鸞上人も、日

蓮上人も一生涯を通じ逆境と苦闘して来たのである。近くは二の宮金次郎、伊藤博文、山縣有朋氏もまた然り、五郎正宗の如き人知れず心膽を碎き歌人芭蕉も加賀の千代女も一生不遇な淋しい生活であつた。其の苦勞の理が則ち無形の生命を永久にとめて人に尊敬せられ且つ人心を指導して居るのである。

左れば世の青年子女殊に信仰に立つものは此の逆境を喜べ、不運を感謝せよ、而して各自の苦境を抱きしめて立て逆境を背負ふて行け艱難は汝を玉にする母胎である。必ず何物か生れて来る成功を急ぐなかれ、遠き姿に於て自己を見られよ。

クサカンムリ

艸を樂しむと書ゐて藥と讀む、神様の「のりと」に草々のわざわい無くお祈り奉る我々人類は神様の草々である。よく人様に云ふ……言草に藥にしたくも（其んな）樂しみは無いと聞くではありませぬか（其んな）と云ふ意味は人様より樂しみを聞くので

自己自身は樂しんでゐないとなく言葉であります。其れは艸と云ふ自己を知らない悟ら無いからであります。自己は神様の草々で有ると言ふ事を悟るには御守護神様により従ふ事が第一で有ります。本當に御氣樂になりますほんとうに安心致す様に成りました、ほんとうに健康になりました。ほんとうに元氣になりました。と云ふ言葉はたへず／＼聞く御話です、其れを聞く私しは御話し下さる皆様より以上の喜びであります、神様の御喜びはいかばかりであります、尊い極みであります。（ほんとうと云ふ事はうそで無いと言ふ實證で有ります。）

御守護神様に感謝申上げ信者諸彦に御禮申上げましやう心の底から。

四句の偈文と般若心經

諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂、此の四句の偈文は天地宇宙の大活動が吾々人類及び一切萬物を生成化育して止まない其の事實を示し以て人々の顛倒して居る

心、夢想の如き迷を離れて大安心を得せしめんが爲に説かれた偈文で前生の釋尊が修道の時に梵天帝釋の變化たる餓鬼の當相に我が一身を供養して聽聞せし尊き偈文にして世に之れを施身聞偈として有意義のものである。凡そ天地間に存在する一切の物は諸行無常で常無く一定の住所に居ない一日一刻寸秒たりとも光陰に遷されて變化極り無い其の變化がある故に、人生には幸あり不幸あり、貴賤あり、貧富あり、苦あり樂がある。進歩があり、退歩があり、生死がある。

是生滅法、即ち生ると死ぬ動と不動、プラスとマイナス建設と破壊の法であつて何物と雖も此の範圍を脱出する事が出来ない。

生滅々己、此の生死の法を滅し己る即ち無常な有爲轉變浮世と云ふ迷ひの世界を解脱する意味で所謂自我を生きながら滅却すれば生死の中にあつても生死なく永久の生命を獲得する事が出来るのである。

寂滅爲樂、生死の相を解脱して眞空實相の理を明らかにせしめて般若の智慧の顯現した時生滅

の相は其のまゝ滅し己ると共に四苦八苦の迷界の中にあつて大安樂に住する。即ち寂滅を以て爲樂とする。

弘法大師は是れをいろは歌に作りて高野の山を開く時に材木を運ぶ者に謠はせたとの事である、

觀自在菩薩は大慈大悲の心から吾人をして此の眞實を悟らしめんが爲に宇宙一切の形色ある物を悉く否定し粉微塵に打碎き解消して空となし而して之を一切智の〇體に歸命して、深甚微妙なる般若波羅密多に依て修行の狀を説かれたのである

其時に觀自在菩薩は天地宇宙を照見し給ひて五蘊ありと認めて彼の菩薩は其は本來空なるものとせられ、た而して舍利子に向ひ此の世界に於ては形色は空にして、空こそ形色形である。空は色より他のもので無く、色は空より他のものでない凡そ色ほ（光線の九色）是れ空なり、凡そ空は是れ色である。受と想と行と識とは亦己に斯くの如くである。舍利子よ此の世界に於ては一切の有形無形には空の想がある而かも生ずるに

あらず滅するにあらず、汚れず、淨からず、増さず、滅せず是の故に空の中には見る處の色なく身受くる物なく從て想なく行なく識なく又色香聲味觸法もなし眼界なく以て意識界もなしと言はれた、又明なく無明もなく明の滅盡することなく、無明の滅盡する事もない、以て老死なく老死の盡滅もなく苦集滅道の四諦なく智もなく得もなし得の状態無きが故に若し、人菩提薩埵の般若波羅密多に歸依せば心の障礙なくして行すべし、心の障礙なきが故に直怖すること無く、常樂我淨の八轉倒を超越して、究竟の涅槃に入るのである。過現未來三世に住する諸佛は般若波羅密多に歸依して己に無上の等しき正覺を證得し給ふたのである。

是の故に人は須らく般若波羅密多の大呪を知らねばならぬ。此の大呪明呪は無上の文にして又無比の呪文である。一切の苦厄を息ひる呪文にして虚偽ならざるが故に眞實の言である。般若波羅密多の中に於て云はれた呪文である。其呪文は我れ人共に往きて往きて彼岸に往き到達せる覺者よ悟道を成就した薩婆訶よと以上神佛の絶對無限の大

智を文字の上に現はした大般若經六百卷の中より撰び出された二百六十二文字にして一言一句眞理にあらざるなく之れ實に天地宇宙を悉くして照破する悟道の法門である

神様

の外(完全)の者全く無し
一人前の者誠に無し恐らくは何分の一が多く上等の方で何分の五と成れば結構であります。

人間
参考 あしやべりはすれど、お話しが出来ず、勧めるのだから、断るのだから、さつぱりわからず、積んで居る内崩れて仕舞ひ、言ふ事は立派だが不實行なんにもならず、下積を、上ばに引き上げればすべり落ち元の木阿彌陀、初めだいな話甘ひと思ふと、終りが穴脱け、ゑらく無い者を或る同機でゑらくすると、ゑらぶつて役立ず、やさしくすれば、頭にのぼせ上り勝手我が儘、療術がうまいと思へば話した、無口のくせにいやみたつぶり、療術が出きると思へば、信者を作れず、自分の處に信者が居附ぬ缺陷を悟らず信者が偶々他支部に行けば、いやみを言ふ爲め信者は迷宮に入る。我慾

勝手のみで信者が減る從て貧乏する自分の事を棚に上げ同志教師の悪口を言ふ不埒者、私しの信者を取つたと云ふ教師の不親切さを自格せよ限り無き實例を一二調して記し見まするに先づ右の通りに御座候得ば何分の一と答へ申す人多き事に御座候總論 家寶として光りまばゆき日本刀の夏尙寒き氷の刃は（床板の）下に投り込んで置く研石の御陰ならずや、身を粉にして初めて自己の自力が現る者なり、依つて以て教師諸君は各教師の宅に訪問せられ、成程説明がうまい御話しが上ずだ療術も良し、思ひ切りもよし、あれもよし、これもよしと自分の手本にするのが誠によし、信者も其通り評番の良き教師の宅を何處でも訪れて導ひかれ自己の徳となさいまし此れ以上な一生修養のかては無し。

見よ見まね、ゆだん大敵目の前にあり。

教はる人より教へる人

の方が何處かに良い處が有ります、と申しましたからと云ふて、私しが皆様に教へる立場で有るから私しが皆様より良いとは申しませぬ私しが皆様に御話し申上げたり、又教へる事柄の根本（根本）はみんな、皆様が御教へて下さつたのであります。古き教草に負た兒に道をおそはる即ち此れで有ります、子供の言ふ事を大人の方が子供のくせに、なまいきな事を言ふなど、一言に蹴散かすが、其れは、大そふな間違ひで有ります。子供が教へて呉れる一言一句が即ち大人の經驗と相對致しまする必要が有ります。

學者、智者には、良所は元より在りまするが、無學無智の方の言ひ知れぬ（一言の内）善い事が澤山有ります。私しは信者の方々に始終絶へずお教へを受けて居ります其一例は、心配、苦勞の有る方が御出に成りますと其のお方の顔形ちが如何にも（外道）に見えます外道とは道ならぬ道外れの行爲で有り、氣分の方で有りますから、言はるゝ事、なざる事が皆（外道）で有ります事が顔形に現はれて見えます、其の見直

し聞き直しますると恐ろしい、心の持ち主な事よと悟りますと同時に極悪人を私してさへ嗚呼他人事では無い此の人の様な根情では相成らぬ、心を込めて改心せなくては成らぬ此の原因は自己即ち吾が胸が高天ヶ原で無い小さな我慾の心で有る其で有るか、心配苦勞が絶へぬのだ、極らくな人生を迎へる事が起きぬのだ、と悟る心が信仰の力で有る悪事を致し度いと思心普通人間性で有りまして悪ひ事を思ひ切り止る力が良心で有り、悪ひ事を善事になしするのが信仰の力で有ります、悪心を善行として現はすのが、信仰心悪友を良友とするのが導く方便法昔からの言葉に悪ひ事は言ひ當ると言ひまするが其例は澤山に在ります、親が子供にけちを付けた爲め良く無い親不孝の子供社會に悪業を動きました例は決して少無くは有りますぬ。悪ひと思ふ事は良く無い事で何事も良ひ事と信じて善くする事は、信仰で無くては成りませぬ、一度ひ信仰を致しまする方は普通の人とどこかに勝れた心持で無くては成りませぬ、一般の人と同じ様な事では信仰致しまする威神力が缺けて居る分有

様佛様の御靈に申分の無いわけです何となりませれば其人自身の缺點を世評にして下されば誠に幸で有りまするが、神様でもとか又は佛様でもと言はれましては神様佛様を(でも)にする畏事で相濟まぬ事で有ります。心すべき事柄で有ります。凡そ物事の行き違ひと申します者は先づこふ言た事が多いので有ります。天上天下唯我獨尊をお説きなされた御釋迦様の御意志其儘を説て居る人は一人有りませぬ、天上天下謂る天地間に御釋迦様が有りがたいから御釋迦様を拜め御詣をせよと御説きなさる人ばかりで有りまする。御釋迦様は尊い御方で有事は當然すぎる當然でありまするが、御釋迦様は釋迦が尊いから釋迦に御詣りせよとは御仰では有りませぬ。天地間に於て釋迦は釋迦が尊いから釋迦は釋迦を(自ら尊ぶ)ので有る。故に○山は○山が尊いから○山を自ら尊び敬ふと言はざるを得無いのだ。然るに一般の宗教家は神が尊いから神様に御賽錢を上げよ寄附をせなくては罪滅に成らぬと説いて居る。此れは金儲先生で、迷ひ苦るしんで居る人を一層足(神込)を掛けて、外道に誘ひ地獄の道案内をし

て居るのだ我心靈界の教は、自己を尊ぶが爲め、御守護下さる神様佛様を崇拜、御教(祝詞)を奏上奉るのだ自分の(身)を先づ修めて家(治)國家泰平となる忠君愛國は茲より出發せねば相成らんのだ。論ずるは安いが難い實行力の伴ふ處に心靈界の教の價値が現れるのだ釋迦とは(ゆるす)と云ふ姓名で有るのだ、許すと云ふからは許されべき事柄が有り許すべからざる事實を釋したので前の罪も釋し又今度の罪穢も釋せし事を加へ其れに是(神入)(ダブル)何回でも釋を加へた其慈悲の心が釋迦と言ふ尊稱として現われたのだ許される人より釋人となれ人心(むやみ)(無暗味)(無矢身)(夢暗)(墓冥)に人を恨むな誹な皆身の爲め修養の糧と想ひどんな難義な事でも心配の有る事でも先づ(内)(家)(中)(明)(空)て見られよ、必ず得心の行く事が出来ます吾身吾心の惱は決して他人より來たのでは無い我が身我心より行爲と現はれたのだ短氣短命、元(根)に(ゆつたりと)心行く迄大きな(意見)心持氣分で、ゆつたりと相談して御覽なさい、結構な解決が出来ます、基督が重さを負て疲たる者吾に來れと

叫ぶ其れが即ち日本古來の三人寄れば(もんぢゆ)(文珠菩薩)の智慧で有る。然る處人多くは遠吠の感全く多く、敵と味方と談合して見るとなんだそんな事が其んな事こんな大袈裟な事をしたと笑ふ事は決して少なく無い事です。當つて碎るで萬事萬端何事でも遠くに居て慮ひて居ては成りませぬ、人を誹ては成りませぬ、恨らんで成りませぬ、旅は道連れ世は慈悲で、無情の人計りは有りませぬ。心靈界教會信者の方の様に、親切心の人ばかりの集團が有りますからには不親切の人より速に放れ恨み難苦るし身より明め決心を極め付けて強き正しき安心の(嬉樂)(今日樂)の吾心靈界教會の導こそ正しき貴下の人生行路なる事を悟れ今すぐ(直ぐ)

極らくは 十萬億土の はてて無し

己が心の まんなかにあり

右から左 左から右123と御讀下さい

1 「今日の御仕事は全部済み

3 「御化粧も美しく

5 「御食事の御仕度もおいしい相に出さ

7 「御主人の御歸りを待つばかり

9 「お湯もぐらくちんく

11 「御主人様が早く御歸り遊ばせば、あれも此れもと喜びの御話し致し度ひ事ばかり 私しや誠に しやわせ者よ

13 「生き甲斐の有る幸福者よ 満足だは

此れもお父様お母様の教への幸よ

御先祖様の御助よ大御神様の御守護

なのよ 嗚呼有り難む幸福の心

お隣のお奥様を見るに付け 聞くに

付け私しや誠に有難い 世の中に不

幸の方が有る爲め私しの様な幸福の者のあらわれである事を悟らせて頂く事の有



り難さよ。

2 「今日も又仕事も何も手に付かず

4 「髪も結はず御化粧もせず 6 「主人の食事は愚か 自分もろくろく吞まず食はず

8 「何もかもそつちのけ 10 「主人の奴が歸りたなら遂日もの奥の手見せて呉れん

12 「くやしい 残念 無念不足の思ひ 「足が無い」「幽霊」「おばけ」こわい心の

持主 此の世にも あの世にも 行きつもとどりつ 迷の心 苦心く 苦世く

送る不平漢 世の中も人も見違へて居る人 目を御覽下さい 片目大きく 片目

小さい煙の中にも三年と云ふが 此の人は火の中にふらくとふらついて居る人

お隣のお奥様は酌に觸程 幸福の方達は 敢て上流の家庭に生れた人でも無し

私しや此れでも相當の家柄に生れた、玉の様に愛らしく、美しく愛育せられ教

育もるが社會政度の罪なのだわと不平不満のお奥様かな。



常に備へよ、非常時に

一五八

「私は熱心な信者でありませう。」と言ひ切る人は實に多くある。然し、「私しの信仰は、こんなに有難く立派なもので、私は、信仰に依つて無上の悦樂に居る。」と言ふ人があるだらうか。

昔、ある宗の熱心な信者が、妻と共に、毎夕一刻宛經本を讀む事にしてゐたのであるが、或日、卒然として本を掩ふて言ふには、「若し、此處に書いてある事が、眞の誠であるならば、私達は救わるゝ事も出来ない罪人である。」と言つて其夜は、眠る事も出来ない程悶え苦しんで考へたのである。

然し、翌日の夕方になると、又例の様に、妻と共に經本を讀み始めたのであるが、暫らく讀むと、亦本を置いて、

深い溜息をして、「あゝ、若し亦此所に書いてある事が本當ならば、私達は最早決

して極樂に行く事は出来ない。

死んでからの未來永遠まで二人は、恐ろしい地獄で暮さなければならぬ。

こんな嘆かましい事があるだらうか、最早私達は生きる事も恐ろしくなつたと言つて前にも増して悲嘆に暮れて、その日は大切な仕事まで休んで、

村の聖者を訪ねて、自分の苦しみを詳に訴へた處、その聖者は腹を抱えて哄笑して

曰く、「あゝ、お前さん達はあの結構な經曲も、恐ろしく見へるのか、さあ、最早悲しむ事はない。

家へ歸つて、更に熱心に、その先を讀んで、仕事にも、信仰にも、精を出してお勵みなさい。」と言つて、その儘口もきかずに奥院へ這入つてしまつたので、彼の夫婦は何事か譯も判らずに呆然としてゐたのであるが、余りにも、自信に充ちたその聖者の言語動作に心を持ち直して、一先づ家に歸つて、その續きを讀んで見る事に決めた。慄へる手に經本を持つた彼の亭主は、

一五九

まだその本の數行も讀まない裡に、欣然絶叫して、「あゝ、有難い。若し此處に書いてある事が誠ならば、私達はどんなに幸福なのだろう。」と言つた處が、妻曰く「あなたは、何時も結構なお經本に書いてある事を、『若し、本當なら……』等と半分疑ひ乍ら信心をするから、今度の様に、要らぬ心配をして聖者に嗤はれたのです。此の後は心から信心をして末永く幸福に暮す事にいたしませう。」と言はれて、始めて「成程お前の言ふ通りだ、私が半分疑ひ乍ら識らず識らずに信心したのが悪かつた。以後は、鵬の底から信心をする事にしやうと言つて、其の後は眞心から信心をして、毎日仕事に精を出したので、間も無く、その夫婦は、年來の宿願であつた子寶を授けられ、家運は前にも増して隆盛になつた。」と言ふ話がある。此の話例に依るまでも無く、凡て信仰とか信心とか言ふ事は、皆、第一に我が身の爲にする事であると言ふ事を忘れてはならない。だから、神佛は又人と切離して存在するものではない。鬼も蛇も地獄も極樂も此の世の人の心得違ひから、此の世で現れるのである。

癩る病を我が心から重くする人、無駄な事をクヨ／＼と何時までも心配をする人、その病その無駄な心配こそ地獄であり、罰である、釋然として、不心得を正し、確固たる精神を持つてゐる人は、決して、下らない事に憂惱されてはゐない。

身体が不健康だと、不健全な精神になる様に、心に患ひのある人は、亦必ず病む事は科學者が何と言つても、教育家が口を飛ばして否定をしても古今東西の吾人の先祖の例を見ても、何尋疑ふ余地はないのである。

諸子は、病を憂ふる前に、心の病を追放せよ!!

諸子は、貧しさを嘆く前に、心の貧しさを改めよ!! 心は吾が物、吾が心を改める

に、誰に憚る事はない!

●心●靈●界●の●教●は●、●心●の●病●の●名●醫●で●あり●、●魂●の●養●育●者●で●ある●、●我●の●得●た●信●仰●は●、●私●を●し●て●偉●大●な●弱●き●者●の●味●方●た●ら●し●め●た●、●惱●む●者●は●來●い●、●苦●し●む●者●は●我●に●救●を●乞●え●、●我●は●た●ゞ●欣●ん●で●救●ふ●事●を●知●つ●て●ゐ●る●、●強●い●心●の●持●主●、●強●い●信●念●の●持●主●で●な●い●人●は●非●常●時●に●、

何を得んとして生きるのか？ 信念の無い人は好機にも迷ひ、心の弱い人は、好況時にも、世の落伍者である、非常時には、先づ心から備えよ、豫は、強いて呼ばぬ人である。

強からんとする者、病める者心暗き人は、身の爲家の爲進んで、我に來れ試みに訪ねて見よ、今すぐ。

有り難い理由

●心●靈●界●の●信●仰●は●何●ぜ●有●り●難●い●か、何人にも出来るし世界中の神様佛様を始め各人各々の御守護神様を拜み奉るので、家相、人相、手相、方位、病氣を治す妙不思議の靈術、何から、何まで全部一人一人に、何人にも教へられ、覺えられ安ん、日常人助けの下さる様に日成らずして上達し、又教て教授料を取るでも無し、金のかゝる事も更に／＼無し、此れが天下一品の信仰で有り、即ち有り難い理由で有る、一千圓のダ

イヤは所持者一人有り難いかも知れぬが、第三者にはさつぱり有り難く無む、千圓の川砂を道路に敷て御覽んなさい、何千何萬の通行人が一人一人に有り難い事では有りませぬか、其如く心靈界の教へ一人一人に何人にも教へるのが誠に有り難い事なのです。

心配苦勞の人、先ず行け、先ず來れ、幸福たれ、本書の讀着は、一度御出有れかしと御勤め申上ます。

安心係

自己の事は自分で、分別の付かぬ者で有ります、御一人で御思案なさらず何事でも御遠慮なく御相談下さいまし、家庭、親子、失業、家屋、金錢貸借、社會殊に戀愛結婚等の問題を始め、天下有ラユルあなた又は、あなたの知己、朋友に、生じたる、事柄を圓滿に解決致しまする目的を以て特に安心係を設け安心の下さる様、期待いたします。御相談遊ばせ、安心するはあなたの幸よ、くよく／＼すると病氣にかゝる、安心すると丈夫に成るし、七珍萬寶、山なす徳で、聽てお家の繁昌、御國の御爲め、喜び勇んで、働きませう。澤山儲けて、御詣り致しませう。

心 靈 界 之 教

高天原 { 神 | 佛 } 乐 極

悟	嬉	安	心	長	命
布	施	忍	耐	智	慧
名	譽	位	置	財	產
福	壽	榮	達	子	孫

信 仰 眞 行



迷 我

忘	語	惡	口	兩	舌
盜	囚	殺	生	邪	淫
病	氣	死	亡	離	別
餓	鬼	畜	生	修	羅

地 獄

時代が生だ、心霊界、何を去て置ても、先ず讀め、何回と無く、理解する迄、熱心に讀め、其から人にも讀ましめよ、決しておしまる置下さるな、おしまいに成りますよ、覺る度ひ方、何人でも來れ、人を救ひ度い希望者は來り學べ。

生れ甲斐の有る人となれ人、成せ人、
心霊界同人

己が目の 力で見ると 思ふなよ、

月の光で月を見るなり

教とは、石井の教(文)を(求)められよ、直に教ふ事の出き得る道を與へん、先らば自ら救はるるなり、信ぜよ自己を。

不動尊 不同損

健全なる成功は、一ツに自己の運命の活用、吝まざる努力、とに依り其本能を善用し一生を、限りなら神様の威神力の御守護に従ひ奉り、強き信念正しき信仰の導の基に自己の本領を發揮し常に不動の精神を養はざるべからず。

不動明王尊

ふ どうめうおうそん をヂット拜し見よ、片眼は天を拜し、片眼は地をねめつけ、猛惡なる形相右に降魔の真劍をひらめかし大聲疾呼して其の非を論し、左手に大繩を持ちて縛さんとの氣勢加ふるに、火焰を背負ひ前後左右より敵を睥睨夫れを壓るの氣概誠に確固不動の姿勢なり之れ即ち不動尊の御威力成り、不動の精神と信念、よく目的を達する爲めには背後よりの猛火征めに會ふが四方八方より色々の迫害を蒙るうが、譏利暴言、誹謗の譏を以て吾が自由を束縛し様と大繩を以て迫らうと動かざる事大山の如く、びくともしない自己に恥ざる確固たる信念の修

養を持つては目的に進むに如何なる難事も事ともせず果斷よく破竹の勢を以て稚量の有らん限りを思ふ儘に發揮する事が出来得る。之れ全く不動尊の如く此の不動尊を吾か不動心と合一ならしむる信仰が心靈界教會の教へにして、吾が心が不動心なるが爲め不動尊の御利益御加護を授くる者なり。

不同損

ふ どう そん 不同損あの周章狼狽せる平家の一族を見よ、檀の浦の藻屑と見事惨敗の浮目を見せたは此の不動明王尊の御意に叶はず、前後左右より劍突を喰され自縛の運命壁同然も腰も立たず、動かざる事死人の如し、背後の火焰幸に火葬元の影たる哉（化喪）となり、不同（不同損）となるなり。

不同

ふ ちやう 異なるを同じからざる様に善用すること賢明なる信念の賜成り、試に見よ一日世の中は變ら無いのが良い事で又變る事が良い事で有ります。資産家は貧乏人に成らぬ様に變らないのが良い事で、貧しき人は資産家に變るのが良い事で有ります。

そらかと申して世の中は資産家ばかりでは趣味の無い者です。有資産界の街道のさびしき事よ賑な貧しき人が有つてこそ資産家の妙味有り、其貧乏人が奮起して功成り資産家と變り、悪人が悟りて善人となり、一寸先きの見ぬ夜(世)の中、成功しそらも無い人が成功し、ゑらそらに見ゆる人が落伍者たる妙味あり、其の實例を知己友人を一人一人と考へて御覽んなさい、恐らくは想當る人があすこにも茲にもと思ひ起しませす事ですやう。

出世魚と稱へらるゝ、をぼこ、すばしり、いな、ぼら、まるた、と變り(不動)不同其で人間の變り様の概略を申そうなれば、水見、赤見、(嬰兒)(垢子)(アゴレカ)(ニゴリ)此れでは成功する道理が無い。

幼年(妖年) アヤシ 妖怪 青年は(誠年) マゴコロ (無私) (聖年) スグレタル人に通ずる故に、青年は「順」で有る。温順で有るが爲め人を信す、不動で有る自身が不同の世(夜)の中を見る時は衷心より怒る、残念がる、吼噴、誹微の決果、

たま／＼不遜の動作が現はれる恐れが有る、其から(若者)(年頃)(盛り)(老年)など云ふて變る。(不同)さる世渡りなり。

一日にも朝と晝と夜の差別ある如く、會ふ人毎に又不同變る處に妙味ある様に、土地が變に又旅行の樂みも、食物の變る處に珍味佳香の舌鼓を打つ等一種言ひ得ぬ趣味が存在する者なり、人生行路の自然の力で有る。此の不動明王尊の心を吾心の眞隨として世の中が不同心の人多き世渡りを予(ワノレ)の心の内に納め(不道)道ならざる所を道とし開拓する苦心苦勞が人生感の勇氣で有り妙味で有る。勝利者たらんとするには不動尊心信仰の力が體心光身功の儒勳者で有るが爲め天地人に通じる秘法で有る汝信ぜよ予は信ず、絶對に信ず不動心。

不同損のお話を今少し續けて見ましやうなら、息は親の家業を續ぐ事を好まぬ息の意見、親の古ひ家業には満足出來ず、呉服屋の息が建築屋の弟子となり、瀬戸物屋の息が少説屋のまねに變り、大工の息が役者の下羽となり、長い／＼家柄を潰し百姓の息

が百姓を嫌いの元根 因は百姓は年百年中同じ仕事を仕て居るなんてい馬鹿々々しい事だなどと考へ違へをして都へ飛び出して見ると都でも何の商賣でも朝から晩まで同じ仕事をせなくては成らず他人の仕事がよく見ると自分の仕事は何となく馬鹿くさくなり云ふ浅い考より経験の薄い精神の至らぬ決果、色々と迷ふので有ります。

私し想ひまするのに古ひ仕事を新らしく致ししますのが賢明で有る事と信じます。昨日の御天日様を新らしく迎へる今日の御天日様と仰ぎ尊び奉る其心こそ、日新々々又日新と申しまして新らしき心を養ふ新人の悟らねば成らぬので有ります。湧き出る有りがた味こそ、不動尊に對し奉る心霊界の教へで有ります。話を變へまして、御不動様の前に、八大童子のましますのは世界に對する八方を指し我身なれば頭の、八關八州日本の古き呼稱を大八州と云ひ。

三十六童子は 徳川の旗本三十六騎戸毎の入口の戸もしくは格子戸が三尺の六尺襖障子が三尺と六尺、座敷の畳が三尺の六尺三尺の童子、六尺の男子

袴の仕立が前が六折後が三折淺草の觀音様の御堂が間口十八間奥行十八間の計三十六間、人の生れたを産(三)と云ひ芝居の始めに三番叟を跡み、收入祿を食と云ひ建築の地平の平を祿を云ふ三三云ふても分らぬ奴を六でも無い奴と云ひ六な事は無い。家の生活も六六食ふない此れと云ふのも八大童子三十六童子の名を解して見る事かくの如くに御不動様に御教へ下さるので有る尊さを感謝して此の稿を終ります。

高天原之近道

信仰は學力でも智腦でも悟れませぬ又腕づくでも、さつばり當達致しませぬ、信仰とは人の言ふ事を人がそつですかと迎へる心が始めて、信仰の第一歩に入るので有ります、其れから一歩進みまするのには、深くく交りますると、なる程ナアと難有い事を見出しします。其れが、深交の賜物で有ります。

第三步目は真に行ふて眞理をあぢはいますると、眞行せずには居られませぬ。眞行が聽て自己に自信(心)力が付き(心光)と申して、心の光を放ち人一倍ひ信用を得て

こそ進み行ふ勇氣と實力との合一性が一つも間違への無き成功の（いき）（生）に達しますから思はず、幸福となり、榮達し吾一人のみならず子孫一族までも、繁榮するの
 で限り無き名譽を備、搖き無き位置を勝ち得るのであり、望む以上な、賊寶を集むる
 で無く、集まる者です。其餘徳を他人様に迄も布施をなし助け導く身分となりました
 事は（身分とは、自身の徳を自ら分ける）ので有ります、すぐれたる智慧は、過去の
 経験と、尊き實力とが泉の如き、人が共に共々に子羊の様な、憂き人の良き事を致す
 事を供養と申しまして、はつきりとした（立心）[↑]の吾が心、悟となり、嬉となり
 安心となるが爲めに己から、長命を保ち、長く永く生た経験が神靈に達し御佛念にか
 なふので即ち、生きながらの

高天原で在り極らく

く人心、活す人心、集り來り樂しかれ人心。

生活で有る。心靈界教の導き悟りて有ります。此の愉快なる心と、なせなれ聽

地獄に一ト落ち

我、己れ我、吾れ我の心仕、心仕で、一ト落、我無者落、我を無したる者は、眞倒に
 墜落、墜陷する、地獄のドンソコヘ一ト落ち、信用も何も有つた者では無い御得意は
 失敗する務め先はしくぢる。餓鬼共や畜生に攻め、せつかんされ、修羅の衢に徊い氣
 苦勞、苦心が病氣と成つて現（暴露）^{（ウツケ）}なるが故に動（キモ）成らず。

ドウにもコウにも工（クフウを）^{（クチに）}働く口、儲口、乞（お願シ）
 成らなくなつて他人の物と、自分の物の差別無く、次から次と皿にやるのが（盗みと）
 なり、弱い者いぢめな殺生の事を重ねてやり、あちらに、こちらにでまかせを吹き竝
 べ（兩舌）信用全くなく貧乏の限りを盡し、遂には家族は離れ親族は遠ざかり我れ迷
 の道にトボトボと年老いて目覺めた時は既に遅い、晚い（日暮）^{（おぼろ）}遅過ぎる老と成り愈
 々地獄の（下積身）の運命こそ哀れなり此の（凶地）^{（きやうち）}（狂智）^{（きやうち）}を他人事に思ふ勿れ注意

一七四
に注意を怠らず誠（清）心込めて神様の御前に寄り縋るこそ人生の覚明の道ぞかし。
地獄極らくの別れ道を教ゆる心霊界教師の務めなりカツ。

先づ此んな者かな

咽喉が悪るいから咳が出るから咽喉が痛ひ、うすぼんやりするから病氣になる、病氣になるから、うすぼんやりする、うすぼんやりするから商賣に失敗する家庭もうまく行かぬ。其からやけを起す、益々貧乏神得たり賢ししとせまり来るから資本も無くなる商品が無くなる折角買ひに来た客も足が遠くなる、信用も薄くなるから張り合無く成り、働くのもいやに成る、三度の飯も喰へなくなる、家賃も拂はぬから居られ無くなる、なにかからなまでにへまになる、氣が遠く成るから死に度く成る、神經衰弱に成るから不性に成る横の物を縦にするのもいやに成る食ひ物もうまく無いからむら食に成る胃病に成るから腹も病む榮養不良になるから頭の働きも愚鈍なるから

何んにも出さなくなる偶にする事へまに成る。心細くなるから心臓病となる、胸がどきつく肺では無いかと診察する氣を付けなさいと注意されて三度びつくり行きがけより元氣無く足の歩みもしどろもどろ、自轉車乗の小僧に叱れ目がぐらつき自働車を止せて自分も止となり、行通妨害で御目玉を喰ひ漸く家に歸れば家族の者におどかれ、慘慚、お小言頂戴のあげく目が眩み不倒れひよろつき物を破損、怪我はする。成す事頓珍陥、感達が元となり、他人を疑ひ世界を狭く、窄い心が行き詰り追ひ込められて身の詰りつまりやつぱり心からなんにも無いから、性が無い。生きて居るのに性が無い。生きて居るのに性が無い。

人間の最後は信仰

神様佛様なりを縋り求むるので有る此の世には神も佛も無い者かなと歎くでは有りませぬか、困た時の神頼み、人間の本來が神の分霊で有りますから元を信仰ので有りま

す、此の事を歸妙と昔より稱へて居ります、此の歸妙を困まらぬ内に、氣妙の心に成る人か幸福で有りますのに相變はらず、氣妙に悟りながらにして悟り切れ無い人が多いで有ります困ら無い前に、神威力に御縫り致しますれば必ず御救ひ下さるのが特權を有する信仰の力なので有ります。凡そ人は良い事と信じた事が決して能く無く失敗に落ち入る事が多いので有ります。御國の爲めに計畫した事が國賊思せられ他人に親切とした事が不親切と考へられ其の厚意が水泡にさする事が殊に多いので有りますあれや、これやと考へて見る時に自分より不幸の者は無い他人の振を見ましてあの人には誠に幸福の人で有る。あの家庭はほんとうに圓滿の家庭で有ると他人事のみかよく見えて自分の事は、さつぱりよく無く見えもするし又思はれます。諸其實どこの家庭でも各人と致しましても決して幸福の様に見えても其實幸福の家庭幸福の人は極少ない者で有ります。

只他人様の事が良く見えるだけの事で其實際は、をそらく悲惨な者です底級の家庭疑は聲が大きく物音は高ひ……騒ぎはかなりそらぞらしい成る可く他人にこれ見よがしに戸外に迄出てどなる吾れ一戸の男兒氣取り、女は絹の布を引き裂く様な黄色聲を張上げ男のどら聲と相和し合唱し物々しい有様に引きかへ上流の家庭は女中すら分らない位ひだが其騒ぎは極めて深刻です。外目に見えぬし聲は底し物音は更に立てぬがねちり伏せ、喰付其あげくは影無き處に消う去る者ですから第三者には分りませぬが眞想を知るからはずごい者です。故に夫婦差向ひで御飯を頂く事などは少ない位です主人の衣服を始め一際かつさい女中任せ主人は食膳に長く居る様な事を欲せず茶も吞ずに立ち癖を付けて居る如きも敢て珍らしい事では無いか、人の心の調停は信仰を置て求むべき道は絶対に無い者です。神様の御力に頼り頼ばこそ其難關を過す事が出来るので有ります、最し信仰心の無き人で有ります成らば必ず一生を過り一族を危き運命に引き入れます、

それで有りますから、心靈界教會の立場より御注意申そふなれば小人と遠ざかるので

小人は他人の噂を致したり陰口を言たりして有りもせぬ事を如何にも知つたか
 ぶりをして吹聴する。又聞く人々魔に受けて合鍵を打つ其れから其れと尾に鱒を付け
 真小莫大に言ひふらすのを得有と心得て居る恐しい者です、廢し難き者共とは斷じて
 交際を斷のが一番よい法方で有ります一般宗教家は信者を殖す事に苦心して居られま
 するが我心靈界教會では信者を斷るのに當らず障らず斷はるのに苦心して居るのです
 然る處近頃は遠ふ廻りの斷りで無く直接其儘斷る事に致しました此れが眞行の深交、
 信仰で有るのを確認して眞に行ふ眞行、が安心の賜もので有ります、心の光、心光が懸
 進み行ふ、進行の勇氣となり成功の粹に達するので有ります。其人こそ、心幸の人で
 は有りませぬか其幸福の心幸に、貴下御自身で有る事を確認せられます様御進言申
 上げます。

借先般神樂會の芝居又種々の餘興に付いて只今川久保先生の御話して有りますから
 一筆申添へます、見る劇を自分の家庭又は信者の家庭其の儘で有る事と想ふ時には悲
 しき涙止め得ず、又我が心靈界教會の信者には一人も無いと確信致しました其時、其
 感情は嬉びの泣無しでは居られませぬ。試に見られよ凱旋軍人を迎ふる時、萬歳々々
 の聲は第三者で無くては叫ぶ聲の出る者では有りませぬ。身内で有るとか兄弟分では有
 るとか、と云ふ人は只々泣有るのみです其で有りますからあの劇に泣のが無理か泣
 かねが理か諸君の監察に任じます。

商賣には資本が入る 社交には智慧も入り學問も入る
 心靈界には何にも入らぬ 裸一貫其身其儘 心一つの置
 き所ろ 神人一體 阿吽の一生 一いきの威神力

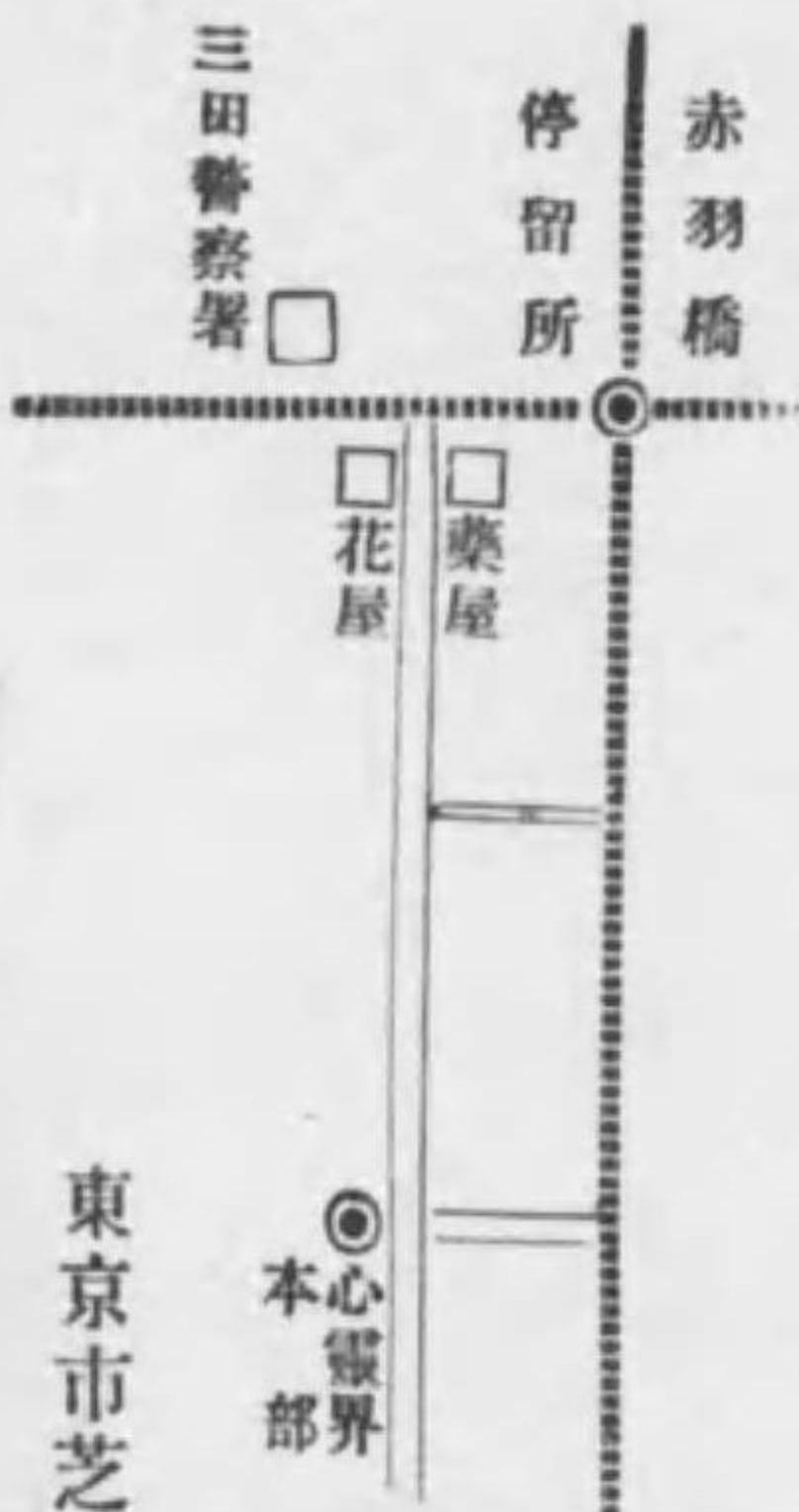
よき心から あき丸 成

一八〇

無頓着にして活氣ある

大擔なる素直の教師養成

- 毎月一日より十日迄午後自八時三十分
講習を行ふ費用二圓三十錢を要す
- 月祭 三日、十三日、二十三日夜
- 奇數日 午後二時講話有來れ



心霊界教會 石井○山

東京市芝區三田四國町二番地一號(三田警察署前花屋と)
(市電赤羽橋下車南方)

●面會

奇數日正午より
五時まで

紀元二千五百九十六年
昭和十一年六月十八日印刷
昭和十一年六月廿一日發行

定價金八拾錢

版權
所有

編輯者 石井 岩吉
發行所 東京市日本橋區濱町三ノ二十
印刷者 間中 喜久一
東京市日本橋區濱町三ノ二十
印刷所 商工企業印刷部
東京市芝區三田四國町二番地一號

發行所 心霊界本部

終

